けいおん!　転生しちゃった僕。

勇吾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
けいおん！　転生しちゃった僕。

【Ｎコード】
Ｎ０８９３Ｔ

【作者名】
勇吾

【あらすじ】
間違えて天国につれてこられた僕。
間違えて僕を天国へ連れてきた天使。
二人が転生して軽音の世界へ・・・・
ただ今、海で遊んでます

プロローグ（前書き）

どうも～
これからよろしくお願いします。

プロローグ

「・・・あれ？」
ここは何処だ？
僕が目を覚ましたところは、なんか真っ白なところだった。
「もしかして、ガ〇ッ？」
真ん中に球体が出てもおかしくないような部屋に、僕はいた。
「夢・・・じゃ無いっぽいな」
『おい！！』
「何・・・？」
僕は、何かに呼ばれて後ろを振り返った。
そこには、小さな男の子がいた。
『どうしてこんなところに居る！！』
「シラナイ。ってか、ここ何処？」
『ここは神の国だ。』
あ～。
そういえば僕、死んだんだった・・・
さっき、ここにつれて来られて、一眠りしたんだった。
色々思い出したところで、この子をからかうことにした。
「神の国って・・・ドラ〇エの？」
『違う！！』
「じゃあ、ペーパー？」
『紙でもない！！』
「じゃあ・・・」
『もういい・・・』
それっきり、小さい男の子は黙ってしまった。
なんだ、いじり甲斐無いな・・・
しょうがないので、僕もそこでいじるのを止め、色々なことを考えた。

そういえば、死因は何だっけ・・・？
そうだ。階段から落ちたんだ。
「冗談はこれくらいにして、僕はこれから何をすれば良い？」
『実はな・・・』
いきなり、男の子が何かを語りだした。
『お前は本来、死ぬべきじゃなかったんだ。』
「へぇ～。じゃあ、キミが間違えてつれて来たという事？」
『そうなんだ。実は、お前が気絶したとき、お前の近くで死んだ男が居てな・・・』
「男？男と間違えられたの？」
心外だった。
こんな話し方をしているが、一応僕は女だ。
『いや、実は私は目が悪くて・・・』
「そんなの言い訳になんないよ！！」
『すまん・・・』
男の子は小さくなっている。
「まあ終わったことはしょうがないけど・・・」
僕は、納得いかなかったけど、しぶしぶ許した。
『お詫びといっては何だが、別の世界に転生させてもいいぞ？』
男の子が、申し訳なさそうに言った。
「転生？」
『ああ。別の世界に生まれ変わるんだ。』
なかなか魅力的だった。
けど僕は、現世に未練があった。
「元の世界はダメなの？」
『元の世界では既に死んだことになっている。』
「そっか・・・」
それは残念だった。
僕は元の世界ではモデルをしていて、自分でいうのもアレだけどかなりの人気者だったんだ。

「じゃあ、アニメの世界もいいの？」
『ああ。元の世界じゃなければ、何でもいいぞ。』
僕は考え、ひとつのアニメに到達した。
「それじゃあ、僕は『けいおん！』の世界に行きたい！！」
僕は、けいおんの世界にあこがれていた。
あんな感じで学園祭とか出来たらいいな～なんてことを思ってたんだ！！
『『けいおん！』か。わかった。』
そういうと、男の子はおもむろにパソコンを取り出し、何かをした。
『あと、間違って死んでしまったものは、三つ願いを叶えてもらえる。』
「ホント！？」
僕のテンションは、最高潮になった。
『ああ。なんでも言え。』
色々あったけど、真っ先に思いついたのは
「それじゃあまず、ギターがすっごく上手になりたい！！」
これだった。
軽音部に入るなら、ギターを引けないとダメだよね！！
『分かった。』
男の子は頷き、パソコンをいじった。
「つぎは・・・桜ヶ丘女子高等学校を共学にして、僕は男になりたい！！」
これは、一度やってみたかった望みだった。
『分かった。』
男の子がパソコンをいじった。
「最後に・・・唯ちゃんちの隣に住みたい！！」
『それが最後の望みだな？』
「ウン！！」
『分かった。』
男の子はもう一度パソコンをいじり、パソコンを閉じた。

『それじゃ、お別れだな。』
男の子が、僕を見ていった。
「もういけるの？」
僕は、けいおん！のメンバーに会うのが楽しみでしょうがなかった。
『言っておくが、次に意識が戻るのは、生まれたての状態からだからな？』
「ふぅん・・・」
じゃあ、また義務教育を終えなきゃいけないんだ・・・
「そっか。で、どうやって行くの？」
『もう一回寝ればいい。』
「ふぅん。じゃあおやすみ！！」
『ちょっと待て！！』
僕が寝ようとしたら、男の子があわてて止めた。
「なに？」
『男と間違えたお詫びに、もう一個だけ願いを叶えてやる』
「いいの？」
『ああ。私はこう見えて、結構位が高い天使だからな。』
「でも間違えたんだ・・・」
『うるさい！！！』
男の子は顔を真っ赤にして怒った。
「あはは。冗談だよ。」
『まったく・・・』
僕は、後この子を見ながら言った。
「それじゃあ・・・君も一緒に来てよ！！」
『え？』
「僕一人じゃ心細いし、責任を持って見届けてよ！！」
『うっ・・・まあしょうがない。』
男の子はしぶしぶ同意した。
「じゃあ僕の双子の妹ということで！！」
『妹？！私は男だ！！』

「ま、いいじゃん♪」
『まったく・・・』
男の子は呆れている。
「それじゃ、おやすみ～」
『最後に言っておくが、全ての記憶が消えるからな。』
「そんな事分かってるよ～」
そんな気がしていたから、驚くことも無く、僕は眠りに落ちた。

「・・・夢？」
僕は、家のソファーで目を覚ました。
何だ今の夢・・・
「兄者～」
妹の涼が駆け寄ってきた。
「どうした？」
「唯ちゃんが、三人で合格発表行こうってさ～」
「んあ？ああ、わかった。」
僕は、コートを持って、唯の待つ玄関へと向かった。

プロローグ（後書き）

どうでしたか？
どんどん感想ください！！

第1話（前書き）

早速１００ユニーク突破です。
皆さんありがとうございます！！

第1話

「聖ちゃん♪オハヨウ！！」
「おはよう。聖都」
「おはよ、二人とも。」
何だ。和もいるじゃないか。
「４人って、涼はつれてかないのか？」
「あ！！忘れてたぁ～」
「忘れられてたんだ・・・」
油井の何気ない言葉に、涼はショックを受けている。
「じゃ、４人でいこ～」
「そだね。準備してくる。」
涼はコートを取りに行った。
「にしても、ずいぶん余裕だね・・・」
「えへへ♪」
「私は心配でしょうがないんだけど・・・」
「大丈夫！！和ちゃんは受かってるって！！」
（僕はどっちかというと唯の方が心配なんだけど・・・）
楽しそうな唯を見てると、そのことが言えなかった。
そのことに気づいた和が、苦笑いしている。
「おっまた～」
着替えを済ませた涼が出てきた。
コイツもコイツで不安なんだよな・・・
「ん、兄者？顔になんかついてる？」
「いや・・・」
やっぱりいえない・・・
「よっし、しゅっぱ～つ！！」
そんなことは知らない唯が、学校を目指して歩きはじめた。

「わぁ～、人がいっぱい！！」
「皆いろんな反応してるねぇ～」
一番心配な唯&涼コンビが、先に学校についた。
学校名は、桜ヶ丘高等学校。
「それより、名前あった？」
僕は自分の番号を探しながら言った。
「え～っと、あ、あったよ！！」
自分の番号を見つけてVサインをする唯。
「あれ？ない・・・」
涼はまだ探しきれてないらしい。
僕は、全員分の番号を確かめたから、涼の番号の場所も分かっていた。
けど敢えて言わなかったのは、涼がなかなか面白いことをしていて、近付けなかったからである。
「む～、拙者の番号は何処だ～！！！」
涼は、何故か側転をしながら自分の番号を探していた。
それじゃ字が回って見つかるわけ・・・
「あった！！！」
見つかったんだ、アレで・・・
「やった！！唯！！」
「涼ちゃん！！」
結果を確認できた涼と唯は、お互いに抱き合って喜んでいて、
「よかったわね・・・」
「うん。よかったよ・・・」
僕たちは安堵していた。
「それじゃ、さっさと帰ろう。じゃあね、二人とも。」
「そうだね。じゃあね～、唯～、和～」

「じゃあね。涼、聖都。」
「じゃあね！！涼ちゃん！！聖ちゃん！！次会うときは高校生だよ！！」
そういって、僕たちは別れた。

第1話（後書き）

今回は、キャラ紹介をしたかったので、短めに書きました。
まだ掴みで、ストーリーには入れてないけど、どうでしたか？
たくさんの感想待ってます！！

キャラ紹介　～聖都～（前書き）

今回はキャラ紹介です。

キャラ紹介　～聖都～

本名：白崎聖都（しろさきせいと）

あだ名（唯）：聖ちゃん

ルックス：前世の影響を受け継いで、若干女よりだが、かなりのイケメン。

体格：小柄。１６０～１６５くらい。

勉強：それなりに出来る。得意科目は数学。

運動：可もなく不可もなく・・・

趣味：ギター、ゲームなど平凡な男子の趣味。

楽器：ギター、腕はプロ級で、結構な有名人。愛用ギターはフェルナンデスのストラトタイプ。

性格：前世の影響をかなり受けている。温厚柔和で、人当たりもいい。

口癖：「僕」や「～だよ」という控えめな感じ。

備考：唯、和とは幼馴染（本人の意向）

転生人だが、過去の記憶がない。

キャラ紹介　～聖都～（後書き）

こんな感じです。
疑問があったらどんどん一言ください。

第2話（前書き）

第二話。ようやく本編に入れます。
けいおん一期の記憶があいまいだ・・・
とにかくがんばります！！！

第2話

合格発表から数日・・・
今日は、桜ヶ丘高等学校、入学式だった。
僕たちは、とある交差点で待ち合わせをしていた。
「唯、来ないね・・・」
涼がいった。
この待ち合わせは、唯が企画したものだった。
けど、ここに来ているのは僕、涼、和の三人だけで、肝心の唯がいない。
「先に学校行く？」
和がそう言ったその時、
Ｐｒｒｒｒ，Ｐｒｒｒｒ
僕の携帯がなった。
「あ、唯からだ。」
それは、唯からのメールだった。
「なんて書いてあるの？」
「えっと・・・『早く教室来てよ～』だって。」
「あの子、待ち合わせ忘れてたのね・・・」
「みたいだね・・・」
僕たちは、呆れてものも言えなかった。
「取り敢えず、学校いこ？」
涼の言葉で、僕たちは学校へと歩き出した。

入学式が終わり、早くも四週間がたった。
俺と涼は、唯達とは違うクラスになり、涼がとても寂しがっていた。

しかし、そろそろそんなことにもなれて、部活などが活発になる時期になった。
この桜ヶ丘高等学校は、何故か2～3年前に共学化した学校らしい。
その名残で、文化系の部活が圧倒的に多い。
どれに入ろうかな・・・
僕は、目の前の入部希望用紙とにらめっこしていた。
「兄者～」
涼が僕の前にやってきた。
「涼、その呼び方、学校では止めろっていっただろ？」
「えへへ・・・ゴミ～ンニ♪」
「それふっる・・・」
「ガーン！！」
「それより、どうかしたか？」
言い回しの古さを指摘しつつ、俺を呼んだ訳を聞いた。
「えっと・・・、体験入部についてきて欲しい部活があってさ。」
「どの部活？ってか入部希望用紙、もう期限過ぎてない？」
「そうなんだけど・・・」
「まあ俺も、人の事いえないかな・・・」
そういって、僕は自分の入部希望用紙をひらひらした。
余談だが、僕は、クラスなどで話すときは、俺というようにしている。
「和と唯は？」
「唯は知らないけど、和は、生徒会に入るらしいよ。」
「唯の情報は無しか・・・。まあ、唯ならまだ決めてないと思うけど・・・」
そんな話をしていると、休み時間が終わるチャイムが鳴った。
「じゃあ、放課後に一緒に行くとしよう。」
僕はそういって涼を席に戻した。

そして放課後・・・
「あに・・・聖都～」
「呼び捨てかい・・・」
「えへへ♪気にしちゃダメだよ！！」
「まあ良いけど・・・」
「それじゃ、行こうよ！！」
「そうしようか。」
僕たちは、教室を出た。
「そういえば、何の部活？」
僕は、さっき聞きそびれた質問を聞いた。
「軽音部！！」
「けいおんぶ・・・？」
「そうだよ～」
けいおんぶって・・・？
「軽音部ってのは、軽音楽部の略なんだよ。」
「なるほど、軽音楽部か。」
僕も涼も、楽器はそれなりに出来る。
涼はベースで、僕がギターだ。
ちなみに僕は両利きで、どちらでもギターを弾ける。
将来はバンドメンバー見つけてデビューしようかと考えているほどだ。
「それじゃ、もし面白そうなら僕・・・俺も入ろうかな～？」
「お～い。無理しなくて良いぞ～」
「恥ずかしいから言うな！！」
そんな話をしていると、音楽室に着いた。
どうやらここが軽音部の部室らしい。
「演奏が聞こえるね～」
「なるほど、高校っぽいな～」

演奏されているのは、『翼をください』のアレンジ版だった。
高校っぽいというのは、音ずれが激しいけど、みんなの息が合っていて、聞いていて心地よい、何故か心惹かれる音楽のという意味だった。（あくまで自己解釈だけど・・・）
僕たちは、演奏が終わったのを確認して、音楽室に入った。
「失礼しま・・・」
「あんまり上手くないですね！！！」
僕たちが音楽室に入ると、聞き覚えのある声が、ストレートすぎる批評をしていた。
「けど、なんだかとっても楽しそうでした！！」
それは、唯だった。
そして、唯は衝撃的な発言をした。
「私、この部に入部します！！」
「「ええ！？」」
僕と涼は、同時に声を上げた。
驚く僕たちをよそに、軽音部のメンバーらしい3人は抱き合って喜んでいる。
「あれ？聖ちゃんと涼ちゃん？どうしたの、こんなところに？」
ようやく僕たちの存在に気づいた唯が、僕たちの前にやってきた。
「いや・・・それより、唯って楽器弾けたっけ？」
「ううん？」
「じゃあ何で軽音部に・・・？」
「だって、私でも出来そうだったんだもん！！」
唯は、僕に向かってほっぺたを膨らませた。
「怒るところじゃないでしょ？」
「あの・・・どちら様・・・？」
唯と僕が話していたところに、カチューシャを付けた女の子が話しかけてきた。
「え？ああ、えっと・・・体験入部なんですけど・・・」
「「「体験入部？！」」」

涼がいった言葉に、軽音部の三人は大きな声を上げて驚いた。
「いけなかったでしょうか・・・？」
「全然！！二人とも、心から歓迎するよ～！！」
カチューシャを付けた女の子が、涼の手を握ってブンブンと振った。
「取り敢えず座って！！」
軽音部の三人に、僕たちは椅子に招待された。

第2話（後書き）

どうでしたか？
おかしいところにはすぐに感想ください。

第3話（前書き）

けいおんって、やっぱ良いですね。
というわけで第三話目です

第3話

椅子に招待された俺たちの目の前には、高そうなお菓子が並んでいた。
「さぁ、どうぞ♪」
髪が長い、おしとやかそうな女の子が、僕たちにそれを進めてきた。
「じゃ、じゃあ・・・」
僕が食べようとすると、横から強烈な視線を感じた。
視線の主は唯で、よだれまで垂らしながら見ている。
「唯、一個いる？」
僕がそういうと、結いは喜んで僕のお菓子を取った。
「軽音部って、何をするところなんですか？」
涼が聞いた。
「えっと・・・」
当たり前の質問なのに、三人とも答えに困っている。
「なんかスミマセン・・・」
「「「気にしないで！！」」」
ノリが分かんない・・・

「えっと、改めまして、体験入部に来たんだよね？」
気を取り直したカチューシャの子が言った。
「あ、はい。ぼ・・・俺は聖都、白崎聖都。」
「私はその妹の白崎涼です。」
「へぇ～、双子なんだ～。私は、田井中律。ちなみに、私がこの部の部長です。」
カチューシャの女の子が自己紹介した。
「私は琴吹紬です。」

次は、さっき僕たちにお菓子を進めた女の子。
「あ、秋山澪です・・・」
最後に、黒髪が綺麗な女の子が、恥ずかしそうに自己紹介した。
「で、私が・・・」
「お前は分かってる。」
「ぶぅ～！！」
唯まで自己紹介しようとしたので、それを止め、軽音部のメンバーを見た。
「皆さんのパートは何ですか？ちなみにぼ・・・俺はギターです。」
「私はベースです。」
「ベース？！」
黒髪の女の子・・・澪さんが反応した。
どうやらこの子もベースらしい。
「へぇ～。ギターにベースなんだ～」
カチューシャの子・・・律さんは、感心したように頷いた。
「お仲間が増えて嬉しいですわ～♪」
おしとやかそうな子・・・紬さんは、機嫌がよさそうにお茶を汲んでいる。
「あの・・・皆さんは・・・・？」
僕はもう一度いった。
「ああ、そうだったね。私はドラム」
律さんが言った。
「私はキーボードですわ。」
紬さんが言った。
「わ、私は・・・ベースです・・・」
澪さんが恥ずかしそうに言った。
どうやら澪さんは恥ずかしがり屋らしい。

「み～お～？」
いきなり、律さんが言った。
「な、何だよ、律？」
「そんなに隠れてないで、こっちに来いよ！！」
「だって・・・」
なんか始まったけど、もう下校時間が近くなってきた。
「えっと・・・もう帰らないといけないので・・・取り敢えず、これからよろしくお願いします。」
「あ、ああ、はい。お願いします。」
僕と涼は、そういって音楽室を出た。
取り敢えず僕は、他に入りたい部活もないし、この部活に入ることにした。
それは良いけど、大丈夫かな、この部活・・・

帰り道、涼が僕に話しかけてきた。
「兄者はあの部活に入ることにしたの？」
「ん？まあね。」
「拙者は少し拍子抜けしてしまったよ・・・」
涼が残念そうに言った。
「まぁけど、俺たちの前だから敢えてあんな感じにしただけじゃないの？実際演奏も良かったし。」
「確かに演奏は良かったかな・・・」
僕達は、軽音部の部室の前で聞いた演奏を思い出した。
若干走りぎみのドラム、とてもおしとやかなキーボード、目立たないけど、陰でしっかり支えているベース、その重なりがとても心地よかった。

それは、涼も同じらしい。
「うっし。」
涼が、拳を上に挙げ、
「拙者があの軽音部を面白くするか！！」
高々と宣言をした。
「流石に一人じゃ無理だよ。」
僕は突っ込みを入れた。
「じゃ、二人で頑張ろう？」
そういって、涼は僕を見た。
確かに、バンド演奏はやってみたかったし、どうなるのか楽しみだったから、
「ちょっと頑張ってみますか！！」
僕も拳を挙げて宣言した。

第3話（後書き）

どうでしたか？
おかしいとこにはドンドン感想で一言ください。

第４話（前書き）

アニメ二話目です！！

第4話

軽音部を見学に行った次の日、僕達は怒る先生に平謝りしながら、軽音部への入部届を出した。
そしてその日の放課後・・・
「取り敢えず、俺は左用のギターを持ってきたけど、涼は何を持ってきたんだ？」
「えっと、拙者・・・私はベースかな。」
涼にも、口癖を変える苦労をさせるために、私という呼び方にさせた。
涼は、文句を言いながらも、きちんとやって、苦労していた。
「そんじゃ、部室に行く？」
「そうしよう。」
僕達は、軽音部の部室、音楽室へと向かった。

「こんちわ～」
「こんにちわ～」
部室に入ると、軽音部メンバーが勢ぞろいしていた。
「あ、聖ちゃん！！涼ちゃん！！」
これは唯。
「おっす、二人とも！！ささ、ここに座って！！」
これは律さん。
「こんにちわ～♪すぐお茶を入れるね～」
これは紬さん。
「こ、こんにちわ・・・」
これは澪さん。
僕は、全員に挨拶をして回り、椅子に座ると、紬さんがお茶を入れ

てくれた。
「ありがとうございます。紬さん。」
僕は、お茶を飲んで、ほっ、とため息をついた。
「そういえば、二人が持ってきたのって、ギター？」
律さんが尋ねた。
「うん、俺のはギターなんだけど、涼はベースなんですよ～」
「ちょっと見せて～」
律さんがせかすので、俺はギターケースからギターを出した。
「あれ？それって、もしかして・・・」
澪さんが、キラキラと輝いた目でコッチを見てきた。
「ああ、これ、レフティですよ？」
「やっぱり！！」
そういって、澪さんは僕の腕を掴み、ブンブンと振った。
「よかった～。私以外のレフティに会ったの初めてだよ！！」
「そうなんですか～。・・・痛いです」
僕の腕は、限界を感じ始めていたが、こんなに喜んでいるのを邪魔するのは野暮だと思い、そっとしておいた。
「ちょっと弾いてみてよ～」
「分かった。」
律さんに言われたので、澪さんが手を離すのを待ち、その後、少しだけ弾いた。

♪♪♪～

「どう、かな？」
僕は、2～3分演奏して、それを聞いていた4人に、感想を聞いた。
「・・・」
「やっぱり下手だったかな？」
一応利き手が右だから、左はそこまで得意じゃない。
「・・・凄いよ！！」

「・・・うん。」
「・・・素晴らしいですわ」
「・・・強力なメンバーだな。」
皆それぞれに感想を言った。
思ったより好評でよかった。
「一応、利き手は右なんだけど・・・」
「「「「え？」」」」
僕がそういうと、皆かなり驚いた。
「聖都君って、左が利き手じゃないの？」
律さんが聞いてきた。
「いや、ホントは右だよ？」
「「凄い！！」」
どうやら、バンドに詳しいらしい律さんと澪さんが、ひっくり返るほど驚いた。
「すごいね～聖ちゃん。」
僕は、皆からちやほやされ、いい気分だった。
「涼ちゃんも弾いてみれば？」
このノリで、唯が涼に言った。
「そうだね。一応実力を示しておかなきゃ・・・」
そういって、涼がベースを出し、弾いた。

♪♪♪～

「・・・」
涼は、前聞いたときより、明らかに上手くなっていた。
「上手くなったじゃん。」
僕は、正直な感想を言った。
「兄弟そろって凄いね・・・」
「格が違う・・・」
二人は、かなり落ち込んでいる。

「なんかゴメン・・・」
出鼻くじいちゃった・・・

第４話（後書き）

どうでしたか？
なんか自慢で終わっちまった・・・
感想おねです！！

第5話（前書き）

けいおんアニメ2話分です。

第5話

「そういえば、澪さんは何故ギターじゃなくて、ベースを始めたの？」
ようやく皆が自信を取り戻したところで、涼が聞いた。
「だって、ギターは・・・は、恥ずかしいから・・・」
「恥ずかしい！？」
何故か唯が驚いた。
「ギターって、バンドの中心って感じで、先頭に立って演奏しなきゃいけないし・・・観客の目も、自然と集まるだろ？」
「確かに、ギターはバンドの華だからね。」
僕が相打ちを打った。
「自分がその立場になるって考えただけで・・・」
ドカーン！！
「「澪ちゃん！！」」
澪さん火山が噴火した。
確かに、人見知りには出来ないだろうな・・・
「大丈夫？」
紬さんが言った。
「そういえば、ムギちゃんは、キーボード上手いよね～」
唯が、突然話を変えた。
「ムギちゃん・・・？」
僕は、呼び名に疑問符を立てた。
「そうだよ！紬ちゃんだから、ムギちゃん！」
「まだあって間もない人に・・・」
「いいのよ！！」
「いいんかい！」
僕が突っ込もうとしたところに、紬さんが乱入して来た。
「私のことは、ムギちゃんって言ってね？」

「えっと・・・じゃあ、ムギさんで？」
「それで良いわ～♪」
ムギさんは、とても喜んでいる。
「でさ～ムギちゃんって、いつごろキーボード始めたの？」
唯は、敢えて空気を読まないようにしているみたいに話を変えた。
「私、４歳の頃からピアノをならっていたの。コンクールで、賞を貰ったこともあるのよ♪」
「へぇ～？！凄いね！！」
唯は、何で軽音部にいるんだろうという顔をしている。
「さぁ、いただきましょう！！」
ムギさんが、僕たちにケーキを勧めた。
「そういえば・・・」
唯が、ある疑問を口にした。
「ずっと疑問に思っていたんだけど、この部室って、やけに物がそろってるよね？最近の高校って、こんな感じなのかな？」
唯の疑問はもっともだった。
確かに、やけに物がそろっている。
ティーカップに、お皿、さらにはフォークやスプーンまでそろっている。
「ああ、それは、私のうちから持ってきたのよ。」
「「自前！？」」
「はい。」
思わず、唯とハモってしまった。
ムギさん、予想以上にお嬢様っぽいな・・・
「けど、律さんは、ドラム以外ないよな～」
「そうだね、律ちゃんはドラムって感じだよね～」
「んなっ！？」
律さんは、僕たち二人の攻撃に相当ダメージを負ったらしい。
「わ、私にもちゃんと、すご～く立派な、聞けば誰でも感動する理由があるんだぞ！！」

「苦し紛れ・・・」
「へぇ～！！どんなどんな？！」
唯は、どうやら律さんの苦し紛れの回答をマジと思ってしまったらしい。
そのせいで、律さんは回答に困っている。
「それは！！えっと、あの～アレだ。・・・かっこいいから」
「そこ～？」
唯は、あからさまに残念そうだ。
苦し紛れの奴から根掘り葉掘り聞こうとするなとは思ったが、僕も正直気になった。
「だ、だってさ！！ギターとか、ベースとか、キーボードとか！！指がチマチマチマチマするのを想像しただけで、た～いや！！！ってなるんだよ・・・」
律さんは熱弁した。
軽く息が切れている。
「まあ大雑把そうだからね・・・」
そこに涼が止めを刺した。
「じゃ、じゃあ二人はどうなんだよ！！」
逆上した律さんは、俺たちに理由を聞いてきた。
「俺は・・・物心付いた時には横にギターと涼がいたからね。ず～っとギターをいじっていたら、そのうちそのギターに愛着持っちゃって、練習しようと思ったんだよ。」
「へ、へぇ～・・・」
律さんは、黙り込んでしまった。
「ちなみに私は、兄者・・・聖都への反抗心で、ベースを勉強し始めました。」
「お～い、無理するな～」
「うるさい！！」
「「「・・・？」」」
ヘッヘッヘ・・・まだまだ苦労してるみたいだな。

僕は、少しの優越感を感じながら、涼に皮肉を言った。
涼は、顔が真っ赤になっている。
ちなみに他の三人は、何のことか分からずに首をかしげていた。

「おかわりはいかが？」
「あ、ありがとう・・・」
まだ唯のギターがないので、僕達はティータイムをしながら過ごしていた。
「そういえば、ムギちゃんは合唱部に入りたかったんでしょう？」
そうだった。
ムギさんは、合唱部の見学に来ていたところを、軽音部（律さん）に拉致られたらしい。
しかしムギさんは、部活選びの基準が違ったらしい。
「ええ。でも、めったに出会えない、とっても楽しくて愉快な人たちの仲間になりたかったの！！」
その言葉に、律さんと澪さんは肩をすくめた。
「そ、そういえば平沢さん、もう、ギターはか買ったの？」
澪さんが言った。
「唯で良いよ？」
「え？」
唯は、ギターより呼び方のほうが大事らしい。
まあ最初だし、それもそうかな？
「私、既に澪ちゃんのこと、澪ちゃんって呼んでるし・・・」
唯が、照れながら言った。
「じゃ、俺は聖都で良いよ～？」
「私は涼か、涼ちゃんで！！」
澪さんは、戸惑った様にあちこちに視線を逸らし、その後、上目遣いで僕たちを見て、言った。

「・・・ゆ、唯、せ、いと、りょ、涼？」
「「か、かわええ！！」」
名前を呼ばれた唯と涼が言った。
確かに、かなり可愛い。
「で、唯？ギターは？」
律さんが言った。
「ギター・・・？」
唯は、２～３秒視線を泳がせ、
「あ！！そっか～！！忘れてたぁ！！私、ギターやるんだった！！」
お得意の天然要素を出した。
「軽音部は、喫茶店じゃないぞ！！」
澪さんが注意した。
「えへへ・・・」
唯は、申し訳なさそうに頭をかいた。
「唯の忘れ癖は、今に始まったことじゃないしね。」
「スミマセンねぇ・・・」
涼が、唯を追い詰める。
涼も天然だな・・・
そんな感じで、一日目の部活は進んでいく・・・

第5話（後書き）

どうでしたか？
今回はちょっと原作重視で行きました。
おかしいところには、ドンドン感想ください！！

第6話（前書き）

アニメ二話分、まだまだ続きます！！

第6話

「そういえば、ギターって、どれ位するの？値段。」
「高い奴は高いし、安い奴は安い。まあ唯が使うものなら、４～５万くらいが妥当じゃないかな？」
「え！？５万！？私のお小遣い十か月分だ・・・」
僕が行った値段に、唯は驚き、落ち込んでいた。
「安いのもあるけど、あんまり安すぎると、質が悪くなるからさ・・・」
「それに、高いのは１０万円以上するものもあるよ」
僕が言った言葉に、澪さんが続けた。
唯は、何かを考え、その後、律さんのほうを向いた。
「部費で、落ちませんか♪」
「落ちません♪」
唯の策略は、笑顔で断られた。

「そういえば、律さん。俺、部費払ってなかったですよね？」
僕は、部費を払うのを忘れていて、財布から札を出そうとした。
「ああ、それは後で良いよ？それより・・・」
律さんは、言いづらそうに言った。
「律さんっていう奴、むず痒いから、やめてくれない？」
「そうだね・・・じゃあ、部長でいい？」
「もっちろん！！」
部長は、誇らしげに言った。
「じゃ、じゃあ・・・」
澪さんも口を開いた。
「私も、澪、って呼んでくれない？コッチだけ呼び捨てってのもち

ょっと・・・」
「分かったよ。澪～」
「はわわっ！！」
澪は、顔を真っ赤にして隠れてしまった。
「いきなり呼ぶな！！」
「えへへ・・・ゴメンゴメン・・・」
僕は、澪に謝罪して、唯の方を見た。
「はぁ～・・・」
唯は、相当落ち込んでいる。
「これ、おいしいわよ？」
そんな唯に、ムギさんがお菓子を進めた。
そして数秒後には・・・
「これ、おいしいね！！」
機嫌が直っていた。
「まったく、単純だな～、唯は。」
「え？なんか言った？」
「なんでもない。」
どうやら、聞こえていたようだ。
次からは注意しよう・・・

「とにかく！！」
澪が大きな声を出した。
「楽器が無いと何も始まらないからな！！」
もっともな意見だった。
「しばらくは、俺のギターでやる？」
僕は、唯に提案をした。
「えっと・・・やっぱり、自分で買ったギターで練習したいな・・・」
「そっか。」

「よーし、今度の休みに、ギター見に行こうぜ？」
「「「「「「オー！！」」」」」」
軽音部、初めての活動が決まった。

その頃、涼はというと・・・
「Ｚｚｚ・・・　Ｚｚｚ・・・」
「よく寝てるね・・・」
「起こすと厄介だから、ほっとこう。」
「ふぅん。」
「可愛いわね～」
「私も眠くなってきた・・・」
とても気持ちよさそうに寝ていた。

第6話（後書き）

どうでしたか？
感想お願いします。

第7話（前書き）

アニメ二話分です・・・

第7話

唯のギターを買いにいくことが決まった日の夜。
僕は、自分の財布を見て、ため息をついていた。
「野口さんが3人と、樋口さんが1人か・・・」
今日は五月の途中で、ちょうど金欠になり始めた頃だった。
「唯に、いくらカンパできるかな・・・」
僕は、自分の所持金を眺め、考えていた。
コンコンコンコン
「どうぞ」
ノックの主は涼だった。
「どうしたの、兄者？」
「いや、唯にいくらかカンパしてやりたいんだけど、金がなくてな・・・」
「拙者もあんまり持ち合わせてないんだ～」
そう言って、涼は手で何かを数えた。
「え～っと・・・諭吉が・・・不在で、樋口さんも・・・不在で・・・」
「おいおい・・・」
涼は、どうやら3桁しか持ち合わせてないらしい。
「これじゃ、唯にカンパできないよ～」
「しょうがない。僕達は諦めよう。」
「そうだね～」
僕は、少し残念だったが、しょうがない。
「それじゃ、おやすみ。」
「おやすみ。」
僕達は、少し唯の事を気にしつつ、ベッドに入った。

そして週末。
「おっす。」
「あ・・・おはよう・・・」
僕が集合場所に行くと、澪がいた。
涼は、唯の家に行っている。
「「・・・」」
会話がねぇ・・・
「あの・・・」
「え・・・な、何？」
澪は、少し話しかけただけで物凄く驚いている。
「軽音部の3人ってさ、いい演奏するよね。」
「え？」
澪は、以外だというような目で僕を見ている。
「どうして？」
澪は、僕に言った。
「いや、確かにテクニックはまだまだだけど、とってもあったかい演奏するじゃん？」
「あったかい演奏？」
「うん。聞いてて心が安らぐような、そんな演奏のことだよ。」
「へぇ。嬉しいな・・・」
「え？」
「だって、こんなにプロ級の腕を持ってる人に、私たちの演奏をほめてもらえるなんて・・・」
「そんなことないよ・・・僕だってまだ高1だし、全然へたくそだから・・・って！？」
ついクセで、僕って言っちゃった！！
「？どうしたの？」
「いや、なんでも・・・」
よかった。気づいてないみたいだ。

「あはは」
「？」
いきなり笑い出す澪。
「だって、こんな風に、男の人と話したの初めてだから、嬉しくて・・・」
「へぇ・・・」
澪は、嬉しそうに笑っている。
よく分からないけど、なんだか嬉しかった。
「お～っす！」
「おはよう～」
そこに、部長とムギさんが来た。
「おっす。」
「おはよう。」
澪と俺が挨拶する。
「後は唯たちだけだな、聖都！」
気づいたときには、澪の僕に対する人見知りは消えていた。
「そうだな。」
僕は、笑って返した。

第7話（後書き）

どうでしたか？
感想おねです～

第8話（前書き）

けいおん！二話分いつまで続くんだって思ってる人、ごめです・・・

第8話

「あ、唯たちきたよ～」
唯と涼が、僕たちの5分遅れでやってきた。
「唯～、涼～、コッチコッチ～」
「あ！みんな～！！」
「遅れてごめんね～」
唯は、小走りでコッチに向かったが・・・
ゴンッ
「イテッ・・」
「スミマセン・・・」
唯は、見事に通行人にぶつかり、涼が謝っている。
そして、後数メートルというところで、
「えへへへへ～」
「唯、危ないよ！！」
道路で子犬とたわむれていた。
「後数メートルなのに・・・」
「たどり着けない！？」
唯、高校生になっても相変わらずだな・・・

「お金は大丈夫？」
僕たちが、楽器屋に向かっているとき、ムギさんが、心配そうに聞いた。
「お母さんに無理言って、五万円前借りさせてもらった！！」
「へぇ～」
唯は、何とか資金を手に入れることが出来たらしい。
「これからは、計画的に・・・」

そういいかけた唯の目に、ある物が留まった。
そこには、デパートの服屋があり、ベージュのワンピースが展示してあった。
「いっけないんだけど・・・」
唯は、そのワンピースに駆け寄って、
「今なら買える・・・」
やってはいけないことを言い、
「コラコラ！！」
それを部長が制した。
しかし唯も食い下がり、
「ちょっと見るだけ・・・」
そう言うなり、店内に入っていった。
「まって、唯～！！」
涼は、唯を追いかけていった。
「まったく・・・唯ったら・・・」
その光景を見ていた澪が、呆れ口調で言っている。
この分だと、２～３０分はかかりそうだな・・・
僕は、近くにあったＣＤショップの事を思い出し、買い物が終わるまでそこに行くことにした。
「それじゃ、僕はあっちのＣＤショップに居るから、終わったら呼びに来てくれる？」
僕は、澪にそう言って、ＣＤショップへ行こうとした。
「え？聖都も一緒に行こうよ？」
「だって、あそこ、女物の店でしょ？」
「関係ないよ！！いこ？」
澪が、僕の背中を押した。
「まったく・・・しょうがないな・・・」
僕は、渋々店内に入っていった。

その後は、服屋で唯が澪にきわどい衣装を着せようとしたり、同じデパートの小物屋を見たりデパ地下で、試食巡りをしたり、ゲーセンでクレーンゲームをしたり、楽しい時間を過ごした。
そして、今はファミレスで休憩をしている。
「はー、疲れたぁ。」
唯は、当初の予定を完全に忘れ、すっかりハシャギ疲れていた。
「へへ、買っちった～」
「楽しかったですね～♪」
部長とムギさんも、かなり楽しんでいた。
「うう、恐ろしきクレーンゲーム・・・」
涼は、全財産をクレーンゲームに費やし、意気消沈していた。
「次何しよっか・・・あれ、なんか忘れてない？」
「「楽器だろ、楽器！！」」
唯が口にした禁句に、僕と澪はそろって言い返した。
「おお！！しまった・・・」
唯は、完全に忘れていたらしく、大袈裟に驚いている。
「「「やっぱり忘れてたんだ・・・」」」
僕は、唯の天然に慣れているからいいけど、他の三人は本当に、驚いていた。
・・・はぁ。
唯、こんなんで大丈夫なのか・・・？
僕は、そう思わずにはいられなかった。

第8話（後書き）

どうでしたか？
とにかくがんばりますので、応援お願いします。

第9話（前書き）

けいおん！第二話どんだけ続くんだ・・・
ちょっとペースを上げます

第9話

僕達は、大手楽器店「１０ＧＩＡ」の地下にある、楽器コーナーに来ていた。
「スゴ～イ！！」
唯が、感嘆の声を上げた。
「ギターがいっぱい！！」
どうやら、楽器屋は初めてらしい。
興奮した面持ちで、ギターを見ている。
「唯！！どれが良いか決めた？」
部長が声を掛ける。
「迷ってるの？」
僕が聞いた。
「え～っと、迷ってるって言うか・・・なんか、選ぶ基準とかあるのかな？」
「勿論あるよ！！」
澪が、説明を始めた。
「ギターって、音色は勿論、重さや、ネックの形や、太さも色々あるんだ。だから、女の子はネックが細いほうが・・・」
「あ！！このギター可愛い！！」
「自分で聞いたんだし、聞いてあげようよ・・・」
唯は、びっくりする位の天然行動を連発しつつ、一本のギターの前に座った。
そのギターは、ギブソンモデルのギターで、結構有名なギターだった。
唯は、目を輝かせながらギターを見ている。
「そのギター、２５万円もするぞ？」
部長が言った。
「あ、ほんとだ・・・これは流石に手が出ないや・・・」

唯は、寂しそうにしている。
「このギターが欲しいの？」
ムギさんが聞くと、唯はコクンと頷いた。
「あっちに、安いのあったよ？」
涼が、唯の気を紛らわすために言った。
「う～ん・・・やっぱこれが良いな・・・」
唯は、わがままを言った。
どうやら、どうしてもこのギターが欲しいらしい。
僕は、そんな唯を見ていると、なんか胸が苦しくなった。
小さい頃から、わがままが少なかったとはいえないけど、ようやく唯が熱中できるものが出来たのだから、このわがままを聞いてあげたくなった。
「ねぇ、部長？」
僕は、おずおずと部長のところに言った。
「どうした、聖都？」
「唯のギターを買うために、みんなで、バイトしない？」
「「「え？」」」
僕は、部長にわがままを言った。
「みんなでやれば、そう遠くない時期に、これを買えると思うんだよね・・・」
「ええ！？そんな、悪いよ・・・」
「・・・確かに。」
意外にも、賛成したのは澪だった。
「私も、今のベースが欲しくて、悩んで、悩んで・・・」
澪が、懐かしそうに言った。
「私も、中古のドラムセット、値切って、値切って・・・」
「店員さん泣いてたぞ。」
「どうしてもあのドラムが欲しかったんだよ！！」
部長も、過去を懐かしく振り返り、それに澪が突っ込む。
あれ？話の流れがなんか違うような・・・まあ良いや。

「あの、値切るって・・・？」
「欲しいものを手に入れるために、努力と根性でまけさせることだよ！！」
「凄いですね！！なんか憧れます！！」
ムギさんは、部長の話に感動している。
「憧れる要素が何処に・・・？」
澪が突っ込む。
「ってか、普通は値切んないでしょ？」
僕が追い討ちを掛ける。
「まあいいじゃん。よ～し、軽音部の第一回目の活動は、バイトに決定！！」
「「「「おお～！！！」」」」
「みんな、ありがとう！！」
こうして、軽音部第一回の活動が決まった。

第9話（後書き）

どうでしたか？
感想おねです！！

第１０話（前書き）

けいおん二話、ようやく中盤戦・・・
この一話でバイと終わらせてやる・・・

第１０話

軽音部、第一回の活動が決まった次の日、僕達は軽音部の部室に集まっていた。
「何のバイトがいいかな～？」
僕達は、求人雑誌を見ながら、どのバイトにするかを決め悩んでいた。
「ティッシュを配るのは？」
部長が提案した。まぁ、確かに無難なとこだよね。
しかし澪は、
「む、無理・・・」
拒絶反応を示した。
「無理なの？」
涼が聞いた。
「う、うん・・・」
「じゃあ、ファーストフードはどうですか？」
「ダメ、かも・・・」
澪は、またもや首を横に振った。
「そっか～、澪には、ハードル高いかもね？」
澪の顔色を見た部長が、優しく言った。
「怖い人が出てきたらと思うと、玄関のベルが押せないし、オーダーを聞きにいけない・・・」
ボフンッ！！
「「「澪ちゃん！？」」」
秋山澪火山が噴火した。
どうやら、自分がバイトすることを想像して、人見知りが発動したらしい。
「ゴメンね！！無理しなくていいから！！」
唯が、申し訳なさそうに言う。

確かに、これほどの人見知りなら、接客業は無理だろう。
「そうなると、結構限定されるな・・・」
僕は、求人雑誌をめくって、何かいい職業を探した。
「理想は、高時給で、人前に出ない仕事だけど・・・」
やはりそう虫のいい仕事は、なかなか見つからない。
「レストランのキッチンは？」
「調理師免許がないと無理じゃない？」
唯が言ったが、僕は首を横に振った。
「内職なんてどう？」
「時給が安すぎるよ・・・」
涼の提案もナシ。
その後、あ～でもない、こ～でもないと言っていたら、澪が突然立ち上がった。
「私、何でもやるよ！！」
澪が、自分の勇気を最大限振り絞った答えだった。
部長は、そんな澪の言葉に笑いかけ、ある求人情報を見つけた。
「あっ！！」
「な、何！？」
澪は、やっぱりビビッているが、それでも逃げなかった。
「これなんてどう？」
「「「「「交通量調査？」」」」」
五人の声がかぶった。
「歩いてる人や、車の数を数えるんだよ。カウンターを持って。」
「あ、野鳥の会？」
唯が、自分の目のところに手で丸を二つ作って、双眼鏡のような形を作って周りを見渡した。
「確かに、これなら澪でもできそうだね」
僕は、この案に賛成した。
「ほんとですね～♪」
ムギさんが言った。

「それじゃ、これで決まりだね！！」
涼が、力強く拳を上に挙げた。

そして週末。
みんなが集合したのを確認して、部長がみんなにカウンターを渡した。
「二人ずつ、一時間ごとに交代だから。」
仕事時間は二日で約１８時間。
日当は約９０００円らしい。
「ほっほっほっほっ・・・」
僕たちが説明を聞いていた頃、唯は、渡されたカウンターで遊んでいた。
「軽快ですね～♪」
ムギさんが、楽しそうに見ている。
「私もやる～！！」
涼が、俺が受け取ったカウンターをぶんどり、カチャカチャと鳴らし始めた。
「なにを～、こしゃくな～」
部長も参戦するが・・・
「イッタ～！！」
どうやら指を挟んだらしい。
「むきになるからだ！！」
「自業自得だね。」
僕たちが突っ込む。
「二人とも、酷いよ・・・」
「調査開始まで、あと少しありますね。とりあえずお茶にしない？」
「わぁ～、ピクニック！！」

「ここで飲めるなんて思わなかったよ！！」
「はぁ、みんななんだか心配だ・・・」
「・・・お～い」
律さんは無視され、少し可哀想だった。

ブゥーン
・・・カチッ
ブゥーン
・・・カチッ
「ダルイ・・・」
分かっていたことだが、この手の仕事は集中力が続かない。
僕の横に居る部長も、どうやらそのたちらしい。
「なぁ、聖都？」
いきなり、部長が話しかけてきた。
「・・・ん？」
「聖都ってさ、唯と幼馴染なんだよね？」
「まあね。」
「ふぅん・・・」
「・・・それだけ？」
「ウン・・・」
そんな感じで、淡々と進んでいった。

お昼休み・・・
僕達は、唯が持ってきた憂の手作り弁当と、ムギさんが持ってきた
高級お菓子を食べ、昼寝をしていた。
「ねぇムギちゃん、すっごくおいしいんだけど、こんな高そうなお

菓子、いっつも貰っていいのかな？」
唯にしては珍しく、ムギさんを気遣った質問だった。
「いいのよ♪いつも色んな方から頂くんだけど、家に置いておいても、あまらせてしまうから。」
ムギさんは、恐ろしいくらいのお嬢様発言をした。
「いろんな人から余るほどお菓子を貰う家ってどんな家！？」
唯は、物凄くうらやましそうだ。
澪と部長は、反射的に流れる雲を数えていて、自分でも驚いていた。

午後も淡々と進み、あっという間に夕方になった。
「一日目終了！」
僕達は、仕事がこんなに大変なのかと思い知りながら、ようやく仕事から解放された。
「じゃあ、私は駅へ行くから。」（ムギさん）
「私と澪はバス！！」（部長）
「唯と聖都と涼は、歩きだっけ？」（澪）
「あ、うん。」（僕）
「それじゃね～」（涼）
「また明日も・・・」（ムギさん）
このまま解散しようと思ったが・・・
「うん！！明日もお菓子よろしく！！」（唯）
唯が、何故かお菓子を要求していたが、気にせず帰った。

第１０話（後書き）

どうでしたか？
バイトおわんねェよ！！
と言うわけで、次回に引き続きます

第１１話（前書き）

バイト編、そろそろ終わらせてやる・・・

第１１話

二日目・・・
バイトは何事も無かったかのように、進み、夕方・・・
「二日間お疲れ様。」
「「「お世話になりました！！」」」
僕達は、二日分のバイト代を受け取って、
「「「はい。」」」
それを、唯に渡した。
「一日八千円か・・・」
「お母さんに前借した五万円と合わせても、まだ全然足りないわね・・・」
「六×一万六千円は・・・」
「九万六千円でしょ？後、約十万もだよ・・・」
「後、何回かバイトするか！」
「そうですね。」
「じゃ、また探そっか？」
「それが良い！」
「それしかないよ！」
「やっぱりこれ、いいよ！」
「「「え？」」」
僕達が、次のバイトについて話し合っていると、唯が、渡した封筒を返してきた。
「バイト代は、みんな自分のために使って？？」
「唯・・・」
「唯ちゃん・・・」
「私、自分で買えるギターを買う！！」
唯は、いつの間にか立派な高校生になっていたみたいだ。
「一日でも早く練習して、みんなと一緒に演奏したいもん！また、

楽器屋さんに付き合ってもらっても良い？」
唯は、満面の笑みで言った。
これが、唯なりに下した決断だろう。
「「「うん！！」」」
僕達は、大きく返事した。
「みんな、ありがと！じゃあ帰るね？」
「そうしよっか。みんな、またね～」
「ばいば～い」
「うん！」
「また明日。」
「じゃあね～♪」
僕達は、みんなと別れた。

「それにしても、唯は大人になったね～」
「うん！拙者もびっくりしたよ！」
僕達は、先の唯の発言を振り返っていた。
「えへへ・・・それ程でも・・・」
唯は、照れながら前を歩いていた。
「昔の唯なら、絶対にごねてたよ。」
「そうだね。『絶対欲しい～！！！』って」
「ぶぅ～、そこまで酷くないよ！！」
涼が、唯のまねをして、唯がほっぺを膨らませた。
その時、僕に根拠の無い自信が出てきた。
「ま、絶対あのギターは手に入るからこれからもがんばって！！」
「何でそんなことが分かるの？」
「カンだよ！！」
「そっか！！私、がんばるよ！！」
こうして、僕たちのバイトが終わった。

第11話（後書き）

何とかバイト編終わった・・・
後「もう一声～」ですね！！

第１２話（前書き）

昨日は、諸事情で更新できず、スミマセンでした・・・

第１２話

バイトが終わった、次の週の週末・・・
僕達は、『１０ＧＩＡ』を訪れていた。
「あっちに安いギターがあったよね？」
「うん。」
「唯、どれが良い・・・って唯？」
唯は、またあのギターの前に座っていた。
僕たちが見ていることに気づくと、
「えへへ・・・」
とばつが悪そうな顔をしていた。
「唯、またあそこにいる・・・」
「よっぽど欲しいんだな・・・」
「やっぱりあのギターのほうが、唯にとってもいい刺激になるとおもうんだよね。」
「よっしゃ、またバイトを・・・」
「ちょっと待ってて？」
「「「「え？」」」」
律さんが再びバイトをしようといい掛けたところを、ムギさんが遮った。
僕たちを止めたムギさんは、カウンターへと向かった。
「何するんだろう・・・」
僕が、ムギさんを観察していると、
「あの～」
ムギさんは、カウンターの店員に話しかけ、
「値切ってもいいですか？」
値切りを宣言した。
「それ、言っちゃダメだろ・・・」
店員さんは、怪訝そうな顔をしている。

それを無視して、ムギさんは続ける。
「ギターのお値段、まけてもらえないでしょうか？」
「・・・」
黙ったままの店員。どうやら、失敗みたいだな・・・
僕が次のバイトを何にしようか考えようとしたとき、急に店員が驚いた。
「あ、あなたは・・・社長の娘さん！？」
「ええ？！」
確かにお嬢様っぽかったのは確かだが、まさか、本物とは・・・
唯達は、ギターや、次のバイトの話をしているので聞こえなかったみたいだ。
店員は、電卓を打ち、
「で、では、こんなもんで・・・」
店員が出した値段は十万。
これでも十分がんばっているし、この値段なら、みんなこの前のバイト代を取っているし、がんばれば買える額だ。
しかし、ムギさんはそう思わなかったらしい。
「もう一声！！」
あ、悪魔だ・・・
ムギさんの一言に、店員はガックリと肩をおろし、電卓に書いてある数字を÷2した。

「このギター、五万円で売ってくれるって♪」
「マジで？！」
さっきの成り行きを知らない４人は、相当驚いている。
「何、何やったの！？」
「脅し！？脅迫！？」
「いや、意味一緒だから・・・」

いつの間にか、ムギさんは凶悪犯になっていた。
まぁ、八割引なんてことになったんだし、疑って当然っちゃ当然か。
「実は、このお店、うちの系列のお店で♪」
「「「「ええ！？」」」」
４人は素っ頓狂な声を上げた。
っていうか、系列店ってことは、実際はいくつあるんだろう・・・
「そうなんだ・・・ムギちゃん、ありがとう！！残りはちゃんと返すから。」
唯は、ムギさんにお礼を言い、ギターに向き直った。
その目は、今まで見たことがないほど輝いていた。

次の日・・・
唯のギターのお披露目会があった。
「おお～！！」
唯がギターを構えると、みんなが拍手した。
「ギターもっと、それらしく見えるね！！」
「それ、なんか酷くない？」
澪の台詞に僕が突っ込んだ。
「なんか引いてみて！！」
部長の言葉を聞き、唯は、ある曲を演奏した。

♪♪♪

「チャルメラ・・・」
唯が引いたのは、かなり手元がおぼつかないチャルメラだった。
「まだ、全然練習してないの？」
「いや～、ギターって、キラキラピカピカしてるから、なんか触るのが怖くて・・・」

澪の問いに、唯は恥ずかしそうに言った。
「たしかにね～。」
「分かる、分かる！！」
その経験があるような、涼と澪が賛成した。
「鏡の前でポーズ取ったり、写真撮ったり、添い寝したりはしたけど・・・」
「「「弾けよ。」」」
唯の爆弾発言に僕、涼、部長が突っ込んだ。
ってか、ギターと沿い寝って・・・
「そういえば、ギターのフィルムもはずしてないもんね。」
澪に言われて、改めてみると、確かにフィルムをはずしていなかった。
それを聞いた部長が、なにやら不穏な動きを見せている。
まさか・・・？
「せりゃー！！なんちゃって～」
「ああっ！？」
部長は、唯のギターのフィルムをはがしてしまった。
フィルムをはがれた唯は、放心状態に陥っている。
「ドクター、これは重症ですな。」
「唯のことだから、もしかしたら立ち直り不可能かも・・・・」
「律！！謝れ！！」
僕たちの言葉を聞いて、澪が部長に叫んだ。
さすがの部長も、反省しているらしく、
「ゴメン！！ほんの出来心だったんだ！！ゴメンね、唯ちゃん・・・」
「ダメだ。完全に放心状態だよ。」
唯は、ただボーっと立ち尽くしている。
「唯ちゃん、お菓子ですよ？」
「そんなので機嫌が直るわけが・・・」
バクバクバク！！

「直った！？」
まったく、相変わらずお菓子に対する執念は凄いけど、高校生がこんなんで大丈夫なのかな・・・？

「そうだよね。やっぱり、ギターって弾くものだよね！！」
ようやく落ち着いた唯が、部長の手を握り、言った。
「ありがとう律ちゃん！！私、やる気出てきた！！」
「うっ・・・そうか！！唯が練習するきっかけになればと思ったんだ！！さすがわた・・・イッタ！！」
なんかふてぶてしいことを言い出した部長に、僕と澪のダブルチョップが決まった。
「恩着せがましく言わなくていいし・・・」
「さ、練習するぞ！！」
「酷い！！澪はともかく、聖都は、女に手を上げるなんて！！」
「自分が悪い！！」

「そういえば、ライブみたいな音出すには、どうすればいいのかな？」
「アンプにつなげば出るよ。」
そういって、澪は自前のアンプを持ってきて、唯のギターとつないだ。
ジャ～ン

唯が軽くストロークをすると、音楽室中に音が響きわたった。
その音は、僕たちのバンドの、本当の意味での始まりを意味していた。
「か、かっこいい！！」
唯は、純粋に音に聞き惚れ、
「やっとスタートだな。」
澪は、僕たちのバンドのスタートを告げ、
「私たちの、軽音部。」
部長がその言葉を付けたし、
「ええ。」
ムギさんが同意し、最後に、
「やっと始まるんだ。」
涼がいった
みんながそれぞれに決意を新たにしていると、部長が、いきなり立ち上がり、
「夢は、武道館ライブ！！卒業までに！！」
と叫んだ。
「「「「「ええ！？」」」」」
僕達は驚いたが、それ程嫌な気もしなかった。
そこに

♪♪♪♪～

唯のチャルメラが・・・
「ゴメン、まだこれしか弾けないや。」
唯が申し訳なさそうに言った。
「まぁ、まだ最初だし、あせる必要はないよ。」
「アンプで音を鳴らすのは、もう少し後にしてからだね。」
そういって、唯はアンプからシールドを抜こうと・・・
「ってバカ！！」

「唯、危ない！！」
「え？」
キーーーーーン！！！
室内に、爆音が響き渡った。
「アンプのボリューム下げる前にコードを抜くと、そうなっちゃうんだよ・・・」
「は、早く言ってよ・・・」
前途多難な、軽音部がスタートした。

第１２話（後書き）

どうでしたか？

ようやく二話が終わった・・・

第１３話（前書き）

追試編スタートです

第13話

唯がギターを買って一週間。
僕達は、唯にギターを教えたり、ティータイムをしたりしながら、まったり過ごしていた。
「ギターの弦って怖いよね。」
不意に、唯がそういった。
「何で？」
僕は、ギターの弦を指で弾いている唯に聞いた。
「だって、細くて硬いから、指切っちゃいそうだもん。」
その言葉に、部長が答えた。
「そうだぜ～気をつけないと、指がスパーッと切れて、血がドバーッと・・・」
「キャァッ！！」
部長の言葉を聞いて、澪が大きな悲鳴を上げた。
「なっ・・・！？」
「澪ちゃんが悲鳴を・・・」
「痛い話はダメなんだ！！」
澪が泣きながら言った。
苦手なの、人見知りだけじゃなかったんだ・・・
しゃがんで耳を塞いでいる澪に、唯と涼が近づいていって言った。
「大丈夫だよ。ホラ、ほんとに血が出てるわけじゃないから・・・」
「澪～、唯は何処も怪我してないから、顔を上げてよ。」
唯の手をみて、大丈夫なのを確認した澪は、立ち上がって咳払いをした。
「まぁ、練習しているうちに、指の先が固くなるから、血が出たりすることはないよ。ホラ！」
そういって、澪は自分の指を見せた。
「わぁ～♪」

唯は、澪の手を取り、
「わぁ、本当だ！！ぷにぷに～♪」
指を触り始めた。
「ぷにぷに～♪」
澪の顔がだんだん赤くなってきた。
「はぁ～♪ぷにぷに～♪」
「あの・・・もういいかな？」
「も、もうちょっとだけ！！」
「なにやってんの・・・？」
僕は、二人のコントに呆れながら、右用のギターをギターケースから出した。

「ねぇ、聖ちゃん。ギターって、何から始めればいいの？」
唯が、困ったように聞いてきた。
「ん～、まずはコードを覚えることかな？」
僕が、唯にコードを教えようと、ギターを弾こうとすると・・・
「唯、はい。」
澪が、唯に一冊の本を渡した。
それは、『サルでも分かるギターコード』という本だった。
「これは？」
「ギターコードの教本だよ。唯にちょうどいいかなと思って、買ってきたんだ。」
「ありがとう！！」
唯は、本を開いたが・・・
「あの～・・・」
すぐに僕に話しかけてきた。
「まずは、楽譜の読み方から教えてください・・・。」
「「そこから！？」」

その後、僕と澪は、唯にタブ譜の読み方などを教えていた。
軽音部、バンド演奏できるのかな・・・

第１３話（後書き）

どうでしたか？
感想お願いします。

第１４話（前書き）

けいおん第三話分です

第１４話

部活の時間が終わり、下校時刻。
「じゃあな。」
「ばいば～い」
僕達は、澪、部長と別れ、我が家に向かっていた。
「え～っと・・・Ｃがこうで、Ｂがこう・・・」
「違う、Ｂはこう。」
「おお！さっすが聖ちゃん！！」
「どうでもいいけど、前見てくれ・・・」
唯がコードを練習しながら帰っているから、危なっかしくてしょうがなかった。
「あんまり根つめないほうがいいよ？」
「確かにね。」
僕は、涼が言ったことを危惧していた。
僕の友達で、僕に感化されてギターを始めた人がたくさんいる。
しかし、そのほとんどが焦り過ぎて、燃え尽き症候群に陥ってしまった。
「大丈夫！！早くみんなと一緒に演奏したいし！！」
ま、唯なら大丈夫かな・・・？
「クスッ、無理しないでよ？」
涼も同じことを思ったらしく、軽く笑ってコードを教えていた。

「唯、涼～」
後ろから僕以外の二人を呼ぶ声がしたので、僕はシカトしようとした。
「あ、和ちゃん！！」

「遅かったね、生徒会??」
「いや、あ、聖都も居たんだ。」
遅れて、僕にも気づいたみたいだけど、知るもんか!!
「聖ちゃん!!無視しちゃダメでしょ?」
唯が僕をたしなめる。
何故かその指がコードになっていたのは、さすがとしか言いようが無い。
「だって、普通このメンバーなら僕にも気づくでしょ・・・」
「ゴメンね?」
「まぁいいけど・・・」
しぶしぶ折れる僕。
僕ってそんなに存在感ないのかな・・・
「そういえば、さっきから気になってたんだけど、」
話変えるの早すぎでしょ・・・
「唯、その指、どうしたの?」

「そういえば、帰るの遅れた理由、生徒会じゃないの?」
コードの事を話し終わった唯が、和に言った。
「うん、図書館で、中間テストの勉強をしてたから・・・」
「「へぇ・・・って、中間テスト!?」」
唯と涼が、素っ頓狂な声を出した。
「それもコード?」
唯の右手は、しっかりコードCになっていた。

「そっか、もう中間テストなのか・・・」
唯が、残念そうに肩を落とす。

「まったく勉強してないよ・・・」
涼が、かなり落ち込む。
ってか二人とも、テストの事知っててても勉強しないでしょ・・・
「折角がんばって、ギター練習しようと思ったのに・・・」
「やっと軽音部が面白くなってきたのに・・・」
「あんたたち、中学の頃からテスト勉強したことが無かったじゃない？」
「そういうことは、心に秘めておくもんだよ、和」
唯と涼をばっさり切り捨てた和に僕が突っ込む。
「そっか・・・なら、大丈夫だよね！！」
「大丈夫じゃないし・・・」

そして、テスト当日・・・
ふ～ん、こんなもんか・・・
僕は、テストを見て思った。
中学校の復習が主で、あまり捻った問題もない。
まともに分からなかったのは、因数分解くらいだった。
因数分解って何だっけ？
Ｘの二乗？３Ｙ？

第１４話（後書き）

どうでしたか？
俺らももうすぐテスト・・・・
嫌だな・・・

第１５話（前書き）

けいおん、３話分です

第１５話

テストが終わった日の放課後。
「やっとテストから開放されたぁ～！！」
部長が、大きく伸びをしていった。
「高校になって、急に難しくなったから、大変だったわ。」
「確かに。俺も勉強してなかったから、苦労したよ・・・」
「そうだな。そして、もっと大変そうな奴が一人・・・」
澪が見た先には、放心状態の唯がいた。
「そんなに、テスト悪かったのか・・・？」
澪が聞いた。
すると唯は、何故は不敵に笑いながら・・・
「フッフッフ・・・クラスでタダ一人、追試だそうです・・・」
「「「うわぁ～・・・」」」
唯の点数は、１２点。
一応言うけど、これは１００点満点のテストだ。
決して５０点満点ではない。
あまりの酷さに、周り三人は、呆れている。
「だ、大丈夫よ、今回は勉強の仕方が悪かっただけよ！！」
「そうそう！！ちょっと頑張れば、ヨユーヨユー！！」
ムギさんと部長が励ます。
けど、そもそも唯は・・・
「勉強はまったくしてなかったけど・・・」
「・・・だろうと思ったよ。」
「励ましの言葉返せ！！あと、聖都も分かってたんなら言え！恥ずかしいだろ！！」
部長は、何故か俺にも切れた。
「だって・・・めんどくさかったんだもん・・・」
ゴツン！！

「イッてぇ！！」
僕がそういうと、部長は、僕の頭を叩いた。
「めんどくさがるな！！」
・・・痛い。

「何で勉強しなかったんだよ～？」
部長が聞いた。
その質問に、僕が答えた。
「たぶん、しようとしたら、ギターが目に留まって、それでコード練習をしてたみたいな感じだと思うよ？」
「はっ、エスパー！？」
「「「図星かい・・・」」」
「でもね！！おかげでコードいっぱい引けるようになったよ！！」
「自慢することじゃないよ・・・」
「その集中力を少しでも勉強にまわせば・・・」
唯以外の４人が、深いため息をついた。
ちなみに涼は、何故か先生に呼ばれている。
「むぅ～そういう律ちゃんはどうなのさ～」
唯は、どうやら部長は自分と同じレベルと思っているらしい。
「あ、アタシ？」
部長は、バックをさぐり、自分のテストを見せびらかした。
「ヨユーですよ、この通り！！」
そこに書かれていた点数は８９点。
「こんなの、律ちゃんのキャラじゃない。」
「まさか部長に負けるとは・・・」
僕と唯は、落胆した。
「オーッホッホッホ！！私ぐらいの人間になると、何でもそつなくこなしちゃうのよ」

部長は、かなり得意げだ。
「律ちゃんは私の仲間だって信じてたのに・・・」
「能ある鷹は爪を隠すってか・・・」
そこで、僕は何かを思い出した。
いや、正確に言うと何かが頭に浮かんだ。
「・・・もしかして、テストの前日に誰かに勉強教えてもらったとか？」
「ギクゥッ！？」
「そういえば、テストの前日に誰かさんが私を頼ってきたっけ～？」
澪が内部告発をして、律さんの本当の姿がばれた。
「ばらすなよ！！」
「そんなことだろうと思ったよ。」
僕は、大きくため息をついた。
そして唯は、部長の方に手を置き、
「それでこそ、律チャンだよ！！」
目を輝かせながら言った。
「少なくとも、唯はいえないぞ・・・」
「赤点とった奴に言われたくねぇ！！」
ドンマイ部長・・・

第１５話（後書き）

どうでしたか？
次は勉強かな？

第１６話（前書き）

更新したはずなのに・・・
ともかくけいおん３話分です

第１６話

「そういえば、聖ちゃんたちはどうだったの？」
「ああ、はい。」
僕たちは、唯にテストを渡した。
僕たちのテストを見て、唯は感心し、部長は驚いて、顔をしかめていた。
ちなみに、僕が９１点、澪は９７点、ムギさんが９４点だった。
「ま、まぁこんなもんだよ！！アタシ、ポカミスしちゃったからさ～・・・」
「苦しいぞ・・・」
僕がそういうと、部長は、ギターを取り出そうとした僕の背後に歩み寄り・・・
ゴツン！！
「イッタ！！」
拳骨を繰り出した。
「からかうな！！」
「手を出すな・・・」
僕に向かってきれている部長に、唯が歩み寄り、肩を叩いた。
「ま、まぁ今回は調子が悪かったんだよ～・・・って何か言ってくれ・・・」
唯は、無言で頷いていた。
ドンマイ、部長。

騒ぎが終わったところで、送れて涼がやって来た。
「どうも～」
「どうしたんだ？」
澪が、遅れた理由を聞いた。

「ええっと・・・ベースの弦が切れたから、買ってきてたんだ～」
そういって、涼は１０ＧＩＡのレジ袋を見せた。
「先生に呼ばれたって言ってたよね？」
僕は、メールを見せながら言った。
そこには、

件名：ゴメン！！

ちょっと先生に呼ばれたから遅れるね！！

と書かれていた。
「あ～・・・確かに呼ばれたけど、大した事じゃなかったから、すぐ終わったんだ～」
涼は、明るくいった。
「へぇ。そういえば、テストはどうだった？」
澪が言った。
「大成功！！」
「へぇ～♪何点だったの？」
ムギさんが言った。
「これさ！！」
涼は、自信満々にテスト用紙を見せた。
「へぇ～、９２点か～」
澪が言った。
「凄いね、涼ちゃん！！」
唯が言った。
「えっへん！ヤマが当たったのさ！！」
涼が言った。
「それ、自慢できないよ・・・」
僕がいった。
「うっ・・・どうしてみんなこんなに良いんだよ・・・」

部長が言った。
「大丈夫？お茶でも飲んで？」
ムギさんが言った。
何か、結構頭いいな・・・
僕は、そう思いながら紅茶をすすった。

「じゃ、結果的に補習は唯だけか。」
澪が言った。
「それなら、部活しても大丈夫だよな？」
部長が言った。
確かに、そろそろ練習しないと、学園祭に間に合わない。
「そろそろ、練習始めないと・・・」
「ムギ！！お茶の準備だ！！」
「ええ～・・・」
僕は、唖然とした。
こんなんで大丈夫なのかな・・・軽音部。

第１６話（後書き）

どうでしたか？
まだまだ続きます。

第１７話（前書き）

未だまだ三話分です。

第17話

別の日・・・
僕は、涼と一緒に、いつものように部室に来た。
「こんにちわ♪」
そこには既にムギさんが来ていて、お茶を入れていた。
「おっす。」
「ど～もぉ～」
「今日は羊羹ですよ～」
「やった！！」
「相変わらずすごいね・・・」
僕は、ムギさんがもってくるお菓子のクオリティの高さに若干驚きながら、椅子に座った。
ガチャ
「お～っす！！」
「涼、聖都、もう来てたのか？」
僕がギターを出そうとしていると、部長と澪が来た。
「どうも～♪」
ムギさんが。すぐにお茶を入れる。
「あ、うん。」
「まあね～」
「珍しく早いな？」
「今日は授業が早く終わったからさ。」
僕達は、椅子について羊羹を食べ始めた。

「そういえば、唯の補習っていつだっけ？」
「さぁ？」

僕は、唯の補習が心配だった。
「そういえば聖都？」
「ん？」
「唯って、昔からああだったのか？」
澪が聞いた。
どうやら、澪も心配らしい。
「あ～・・・」
涼が、昔の事を思い出して唸った。
「そうだよ。」
僕が、ギターをＢＧＭに、唯のことを話し始めた。
「唯はさ、昔からボ～ッとしてて、何をしても飽きっぽかったから、部活とかも何にもやってなかったんだよ。だから、テストもいつもあんな感じだったし、毎日楽しそうだったけど、心の底から楽しんでないような、そんな感じだったんだ～。」
「そうそう。」
涼が続けた。
「和が色々世話してくれたから、今まではどうにかなったけど・・・」
「「「確かに・・・」」」
三人は、すっかり和と唯の関係に気づいたみたいだ。
「だからさ。」
僕が続けた。
「唯がギターを欲しいって言ったとき、正直驚いたんだ。唯が、食べ物以外にあんなに興味を示したところを見たことがなかったから。だから、軽音部は、唯にとって、きっといい刺激になると思うんだ！！」
「そうだね！！唯、最近ホントに楽しそうだしね！！」
涼も賛成した。
「そっか・・・じゃ、まずは早く練習に集中できるように、追試を終わらせないとな！！」

澪が言った。
「そうね。早くみんなで演奏したいもんね！！」
ムギさんが言った。
「よーし！！みんな、ガンバロー！！」
部長が言った。
「「「「「オー！！」」」」」
僕たちは、拳を思いっきり振り上げた。
ガチャ！！
「どうしたの？」
その時、ちょうど唯が入ってきた。

第17話（後書き）

聖都「次回をお楽しみに！！」

第１８話（前書き）

作者「進行遅すぎるっ！！なんとか頑張ります！」
涼「拙者の出番が少ないんだけど・・・」
聖都「ってかぼ・・・俺のキャラ定まってないし・・・」
作者「しるかっ！！」
「「知っとけ！！」」

第１８話

「今日は羊かんだね～♪」
唯が、椅子に座って羊羹を食べ始めた。
「そういえば、先生によばれてたのって、何の用だったの？」
唯は、今まで先生に呼ばれて職員室にいた。
「ふいひのひとは、ごうがくてんとるまで、ぶかつどうきんひだって～（追試の人は、合格点取るまで、部活動禁止だって～）」
涼の言葉に、唯が、羊羹を食べながら、思い出したように言った。
「「「「「・・・ええ？！」」」」」
唯の突然の爆弾発言に、みんなは一斉に驚いた。
「合格店取るまで、か・・・」
「結構厳しいな・・・」
僕たちは、高校の厳しさを、改めて思い知った。
「じゃあ、ここにいるのもマズイんじゃ・・・」
「大丈夫！！」
唯が、部長の言葉を遮り、自信満々に行った。
「どうして？」
「だって、お菓子食べに来てるだけだから～」
部室はカフェじゃないんだけど・・・
「そっか～それなら大丈夫・・・ってなんでやねんっ！！」
部長は、唯にネックブリーカーをかけた。
「ぎ、ギブギブ！！」
「落ち着いて！」
ムギさんの言葉で、なんとか開放された唯。
「りっちゃん、しどいよ～」
「けどな、唯？」
部長に文句を言っていた唯に、澪がいった。
「もしも唯が部活を出来なくなったら、唯、ギターの練習できなく

なっちゃうんだよ？」
「え？」
唯は、キョトンとしている。
「だって唯、楽譜読めないでしょ？」
「あ、それは・・・」
唯は、図星だったみたいで、バツが悪そうに頭をかいた。
「私たち、軽音部が忙しくなると思うから、唯に教えられなくなるんだよ？」
「ええ！？それはヤだよ・・・」
唯は、今にも泣きそうな顔をしている。
「じゃ、一緒に勉強しよ？」
僕が言った。
「ここで勉強すれば、はかどるんじゃないかな・・・？」
ここには、９０点以上の人が４人もいる。
「みんなでやれば、きっと合格点取れるよ！！」
僕は、唯に笑いかけた。
「そうね～。それがいいかもしれないわね～。唯ちゃん、追試はいつ？」
「一週間後だけど・・・」
ムギさんの問いに、元気なさそうに応える唯。
「一週間か・・・」
「短いな・・・」
僕たちは、なんとか唯に合格点を取らせるために、色々考えた。
「・・・やっぱりいいよ！」
突然、唯が言った。
「一週間あれば、なんとかなると思うし、みんなに迷惑をかけるわけにもいかないから！！」
「唯・・・」
唯は、明るく言った。
「みんなと一緒に練習するために、私、頑張る！！」

唯は、一人でエイエイオーをしていた。
「「「「「「大丈夫かな・・・」」」」」」

次の日。
「唯がいないと、何か張り合い無いな。」
部長が、プリンにがっつきながら言った。
その割には、唯の分まで食べてますけど・・・
「その割には、よく食ってるな。」
「ホントだ。唯の分まで・・・」
「えへへ・・・それとこれとは、話が違いますわん♪」
部長は、プリンをほおばりながら言った。
「ウザッ・・・」
「ひどい！！」
思わず漏れた一言に、敏感に反応する部長。
「まぁそれはおいといて・・・」
「酷過ぎ！！」
「唯、ちゃんと勉強してるのかな・・・」
「ホントね・・・」
「みんなまで！？」
とうとう本格的にウザがられたみたい・・・
「けど、本当に心配だな・・・」
「唯、真面目にやってるかな・・・」
「大丈夫なんじゃない？」
部長はもう普通のテンションに戻っていた。
「楽観的すぎでしょ・・・」

追試まであと三日と迫った、ある日。
僕たちは、部室で唯の勉強のことを考えていた。
「唯、勉強進んでいるはずだよね？」
「う～ん・・・進んでるかな？」
澪がふと口にした言葉が、僕たちの不安をあおった。
あの部長でさえ、
「やっぱ、心配になってきた・・・」
「やっぱ唯だしね・・・」
「「「「「うんうん。」」」」」
どうやら、僕たちの唯に対する心配の度合いは同じらしい。
「今晩、みんなで励ましのメールを送るのはどお？」
ムギさんが提案した。
「それ、いいかもね。」
「確かに、名案だね！！」
「私も送ってみるよ！！」
「私も！！それも、すっごく元気が出る奴！！」
こうして、不安を紛らわすためのメール大作戦が決定した。

唯目線
う～ん・・・
私は、ノートを見ながら唸っていた。
すると、
ブーッ、ブーッ
「あ、メールだ」
私は、携帯を開いて、メールを見た。
「澪ちゃんからだ！！」
澪ちゃんから来たメールには、「ちゃんと勉強やってる？油断大敵

だよ。」って書いてあった。
「了解です。」
澪ちゃん、ありがとう！！
私は、澪ちゃんにメールを返して、勉強を始めようとした。
すると・・・
ブーッ、ブーッ
「またメールだ・・・」
つぎはムギちゃんからだ。
「夜分に失礼いたします。無理のないように頑張ってください。美味しいお菓子がまってますよ。」
「おお～！！ありがとう、ムギちゃん！！」
そのあともどんどんメールが来た。
涼ちゃんからは、
「無理しないでね～早く一緒に演奏したいよ！ジャンジャ～ン！！」っていうメール。
聖ちゃんからは、
「根詰めすぎないようにがんばれよ？体壊したら、それどころじゃないからね？」
っていうメール。
そしてりっちゃんからは・・・
「私からのエールを受け止めろー」ってメールと、ビデオだった。
そのビデオは、
りっちゃんが、ポテトチップを投げて、口でキャッチすることをしてたけど、二回目に、机をひっくり返しちゃって、ジュースが溢れちゃったんだ。
「アハハ！！」
私は、みんなから元気をもらった気がした。
ありがとう、みんな！！
私、頑張るよ！！

第１８話（後書き）

聖都「僕たちの扱いひどくない？」
涼「メールはダイジェストだし・・・」
作者「次回をお楽しみに！」
「「話そらすな！！」

第１９話（前書き）

さ～て、特訓だァ！！
ちなみに、最初は唯目線です

第19話

追試まで、あと二日。
あ～あ、また勉強できなかった・・・
私は、なんでテスト勉強がうまくいかないかを考えた。
「そっか！」
私は集中力が足りないんだ！！
「だったら～・・・」
少ない時間でしっかり勉強すればいいんだ！
私は、本屋さんで、『サルでも出来る！！5分間、集中力トレーニング』という本を買った。
「これなら、私でも大丈夫だよね！！」
なんだかできる気がしてきたぞ～！！
私は、早速机に向かった。
「最初の五分は、これで集中力をつけて・・・」
私は、早速本を読み始めた。
けど・・・
「ダメだ～！この本も読んでられない・・・」
けど、ここで諦めるからダメなんだ・・・
パシ、パシ！
私は、ほっぺを叩いて気を取り直した。
・・・けど、それも5分と持たなかった。
ジャン、ジャン、ジャン！！
気づいたときには、私はギターを弾いていた。

聖都目線
追試前日・・・

「という訳で、澪ちゃん、助けて！！」
僕たちが恐れていた事態が起きた。
「え！？勉強してきたんじゃないの！？」
「出来なかった・・・」
「「「「「ええ！？」」」」」
どうやら、集中できなかったらしい。
「じゃあ、追試はマズイんじゃない？」
「合格点が取れなかったら、唯は部活ができなくて、退部・・・」
「それだけは絶対したくない！！」
唯は、泣きながら言った。
さすがに僕たちも、唯が辞めるのはかわいそうだ。
それに、せっかく唯もギターを買ったんだから、一度はみんなで演奏してみたい。
「よし。じゃあ、今晩唯の特訓しない？」
「そうだな。それがいいと思う。」
「ほんと？！」
僕の言葉に、唯は、嬉しそうにはしゃいだ。
「こんだけ点数が高い人たちがいるんだから、みんなで教えれば余裕余裕！！」
「そう！！それに、澪に教えてもらえば、確実に合格店取れるぞ！！」
涼と部長も賛成した。
「いや～、それほどでも・・・」
澪は、褒められて照れている。
「澪ちゃん、勉強得意だもんね～」
「そうでもないよ～♪」
そこにさらに、ムギさんが褒めたもんだから、澪は軽く天狗になっている。
けど、その鼻を部長がへし折った。
「上手いんだぜ！！一夜漬け教えるの！！」

「お、おい！！普通に教えるよっ！！！」
「化けの皮が剥げたね・・・」
「澪、そんな人だったんだ・・・」
「聖都、涼、信じちゃダメだよ！！」
澪はあたふたしていたけど、とにかく、唯の特訓が決まった。

その日の夕方・・・
「そういえば、場所はどこでやるの？」
帰り際、涼が言った。
「俺たちの家は、今日は都合が悪いんだ・・・」
なぜなら、部屋が最高に散らかっているから・・・
「ウチなら、お父さんが出張で、お母さんも付き添いでいないから、気兼ねしなくていいよ？」
どうやら、唯の家は大丈夫そうだ。
「あれ？唯って、妹が居るっていってなかった？」
部長が、思い出したように言った。
ああ、憂のことか・・・
「うん。妹は帰ってきてると思う。」
「それだと、お邪魔にならないかしら・・・？」
「大丈夫じゃない？」
僕が言った。
憂なら、逆に喜んで料理を作り出すことだろうな・・・
「それにしても・・・」
「「「唯ちゃんに妹か・・・」」」
三人は、憂のことを考え、そして、
「全然大丈夫なんじゃない！！」
笑い出した。
ああ、本物見たら驚くんだろうな・・・

「みんな、上がって？」
「「「「「お邪魔しまーす！！」」」」」
僕たちは、唯の家についた。
そういえば、ここに来るのも久しぶりだな・・・
「お姉ちゃん、おかえり！！」
僕達の声を聞いて、憂が出てきた。
「あれ？聖都さんに涼さん？それにお友達も・・・」
憂は、僕たちに気づいて挨拶をした。
「はじめまして、あ、聖都さんたちはお久しぶりですね。妹の憂です。姉がお世話になってま～す！」
そう言って、憂は僕たちに礼をして、おもむろにスリッパを出した。
「スリッパをどうぞ！」
「「「出来た子だ！！」」」
予想通り！！
憂と初対面の3人は、姉との差に驚いていた。
「俺たちのことは、気にしなくていいから。」
僕は、憂にそう言って、唯の部屋に行こうとした。
「はい！あれ？そういえば聖都さん、自分の呼びかた変えたんですね！」
あっ・・・
「へぇ～？聖都、私たちの前ではカッコつけてたんだ～？」
「え・・・そういうわけでは・・・」
憂に悪気がないのはわかってるんだけど・・・
「じゃあさ、憂ちゃん？聖都は普段、自分のことをなんて言ってるのかな？」
「え～っと・・・確か、『僕』っていってました。」
「「「へぇ～！！」」」

「『僕』ねぇ・・・」
「憂、余計なことはいいから・・・」
「あ、はい。それじゃあごゆっくりどうぞ！」
「あ、うん・・・」
憂は、奥の部屋に戻っていった。
「聖都？」
「・・・何？」
澪が、僕の方を叩いた。
「私たちの前では、強がらなくていいよ？」
「強がってないし・・・」
「またまた～！」
・・・来なきゃよかったかも。

唯の部屋にて・・・
「いや～、にしても、姉妹でこうも違うもんかね～？」
「何が？」
部長は、唯と憂との違いのことを言っていたのだと思うが、当の本人は全く気付いてない。
「妹さんに、唯の良いところ全部吸い取られたんじゃないの？」
「ひどい！！」
コンコン
そんな雑談をしていると、
「あの～、皆さんよかったらお茶どうぞ！！」
憂がお菓子を持ってきた。
「買い置きのお菓子で、申し訳ないのですが・・・」
憂は、申し訳なさそうに行った。
相変わらずすごい妹だ・・・

ほかの三人も、唖然としていいる。
確かに、部長が言ったこともわかる。
「唯、もっと頑張れよ・・・」
「何が？」
「もう忘れてるし・・・」

「そういえば、憂ちゃんは、今何年生？」
「中三です」
「もうそんな年なんだ～」
涼が、懐かしそうに言った。
てか、いっこしか違うでしょ・・・
「じゃあ、受験生ですね～♪」
「はい！」
「どこ受けるか、もう決めてる？」
「う～ん・・・」
憂は少し考えて、
「できれば、桜丘に行きたいんですけど、私の学力で受かるかどうか・・・」
「そうだね～」
「大丈夫。涼と唯が受かったんだから。」
「それに、律でも受かったしな。」
「「何お？！」」
僕と澪がいい、それに反応する涼と部長。
しかし唯は・・・
「そうだよ～、おいでおいで！！」
なんとも思わないんだ・・・
「お姉ちゃんに、勉強を教えてもらえば？」
ムギさんが言った。

「え?!それは・・・」
「憂は、唯より頭いいから・・・」
困ってる憂の代わりに、僕が言った。
「あはは、断られたぞ〜!」
「え?!なんで!?」
「で、でも、お姉ちゃんは、やるときはやる人です!!」
部長にからかわれている唯を見かねて、憂が言った。
その言葉に、再び三人は絶句した。
そんなことより、そろそろ勉強始めないと・・・
僕は、なんだか不安になってた。

第１９話（後書き）

作者「この作品はフィクションであり、実在する人物、団体名は、現実とは一切関係ありません。」
聖都「何言ってるの？」
作者「いや、要するに、原作とは違うから、もしかしたら唯が追試を失敗するかもってこと。」
「「ええ？！」」
作者「じゃ、頑張ってね～」
涼「どうしよう・・・」

キャラ紹介～涼～（前書き）

キャラ紹介です。

キャラ紹介～涼～

本名：白崎涼（しろさきりょう）

あだ名（？）：涼ちゃん

ルックス：童顔、聖都に似ていて、かなり美人。

体格：聖都と同じく小柄。１６０前後。貧乳、ロリ体型。スリーサイズは…秘密です。

勉強：良い時と悪い時の差が激しい。いわゆる唯タイプ。

出来る時はすごいし、出来ないときも凄い（別の意味で・・・）

運動：それなりにできる。見た目によらず、足は速い

趣味：ベース、ギターなどの楽器イジリ。またはショッピング（楽器用品店）。ちなみに、服にはあまり興味がない。

楽器：ギターもできるが、メインはベース。ベースの腕は、やっぱりプロレベル。（チート）

性格：明るい性格。本人曰く、「多少のことは気にしない♪」らしい。実は隠れマゾ…

口癖：「拙者」や「兄者」などの古風な言い回しが一部あるが、それ以外は普通の女の子。

備考：唯と和とは幼馴染。（特に唯とは、気が合うのかかなりの仲良し。）

記憶はないが、もとは、結構上位な天使。（面影ないけど・・・）

なんだかんだで聖都のことを助ける、縁の下の力持ち。

キャラ紹介～涼～（後書き）

作者「こんなもんかな？」

「「ってか、なぜ今更・・・」」

第２０話（前書き）

唯のテストの結果はいかに・・・？

第２０話

「じゃ、あんまり時間ないから、集中していくよ。」
「うん！」
唯の家についてから１時間。
僕たちは、ようやく勉強を始めた。
「教科書２０ページ、じゃあこの式。」
「この式は、この公式を当てはめればいいから・・・」
僕、涼、ムギさん、澪が、公式の使い方や、式の展開方法を教える。
唯は、なんとか順調に問題を解いていく。
「これを展開してみたらどうなる・・・？」
「この証明は、これをここに当てはめて考えてみて？」
唯は、スラスラと問題を解いていく。
「唯はここ、結構得意そうだね。って部長？」
僕が気づいたときに、部長は椅子に座って、
「ぐるぐるぐるぐる～」
回っていた。
部長は、とても暇そうだ。
「あ、漫画・・・」
部長は、出番がないのか、僕たちが唯に教えている間、漫画を読んでいた。
なんのために来たんだろ・・・
そのうち、
「アハハハ！！」
「ああ、もう！！」
澪に殴られ、部屋の端に座らされた。
本当に、なんのために来たんだ・・・

「そうそう。ここはその調子で解けばいいよ。」
今は涼が、因数分解を教えている。
唯の特訓は続く。
そして、反省したのか、部長が戻ってきた。
が、
「チョン！」
「アタッ！？」
唯の足を触った。
足がしびれていたらしい唯は、痛さに驚き飛び上がった。
その直後。
「律！！」
ゴン！！
「アダッ！！」
「部長・・・」
全く、何やってるんだか・・・
部長は、部屋の外に連れていかれた。

勉強を始めて三十分後・・・
「ダメだ～！！集中力が続かない・・・」
「おいおい！！始めてまだ３０分しかたってないぞ！」
「全く、唯は相変わらずだね・・・」
「まぁ、唯にしては頑張った方だけど・・・」
僕たちは、ため息をついた。
「唯ちゃん？」
それを見かねたのか、ムギさんが何か箱を取り出しながら言った。
「ケーキ持ってきたから後で食べよう？だから、あと少し頑張って！」

絶妙なタイミングだッ！！
唯は、その言葉を聞いて、凄まじい集中力を発揮した。
「さすがムギ・・・」
「ムギさん、すごいよ・・・」
「ムギちゃん、最強だね・・・」

「お～、みんな、やっとるかね。」
唯が集中力を取り戻してから十数分後。
なぜか爺さん口調の部長が入ってきた。
しかし、せっかく唯が集中力を取り戻している、絶好のチャンスをフイにするわけにはいかない。
僕たちは、あえて部長を無視した。
すると、真剣な雰囲気を感じたのか、そそくさと外に出る部長。
しかしすぐに、
「イエーイ！！私だよっ！！」
・・・
サササッ！
全く、学習能力がないのかな・・・
その5分後・・・
バン！！
「うりゃあっ！！」
性懲りもなく、またか・・・
「とりゃあっ！！うおぉっ！！たあぁっ！！良いしょっと。」
ツカツカツカ。
「頼もう！！」
ゴイン！！×2
「「やかましい！！」」
「痛い・・・」

「美味し～い！！」
僕たちは、勉強の合間の小休止をとっていた。
「このために生きてるって感じ！！」
なんとか入ることが許された部長と唯は、幸せそうにケーキを食べていた。
ってか、ケーキを食べるために生きてるなんて・・・
この人たちの人生って、一体・・・
ピンポーン
「はーい。」
下でチャイムが鳴り、憂の声が聞こえた。
「あら、和さん！！」
どうやら、やってきたのは和らしい.
そして、和が部屋に入ってきた。
「おお、和ちゃん！」
「どう、はかどってる？」
「うん。おかげさまで～」
唯は、ピースをした。
ピースをした唯に笑いかけ、和は、僕たちの方を見た。
「みなさんが、軽音楽部の？」
「うん。紹介するね～」
そういえば、まだ和とは面識なかったっけ？
「こちら、秋山澪ちゃん。で、田井中律ちゃんに、琴吹紬ちゃん。」
唯が、三人を紹介した。
「そして、白崎聖都ちゃんと・・・」
「僕は男だっ！！」
「「突っ込むところ違う！！」」
僕は、きちんと唯の紹介に突っ込んだはずだけど・・・

「「「よろしく～」」」
三人は、和に会釈をした。
「真鍋和です。唯とは、家が近所で、幼馴染だけど、高校でも、同じクラスになりました。」
「幼稚園から、ほとんど一緒なんだよ～」
「不思議な縁よね。あと、聖都と涼も、ずっと一緒なんです。」
「そうだね～」
「懐かしいね～」
懐かしいな・・・
僕たちは、少しの間昔話に花を咲かせていた。

第２０話（後書き）

聖都「次回をお楽しみにっ！！」

第２１話（前書き）

まだまだ続きます

第２１話

「そういえば、ほら。」
１０分位話したところで、和が持っていたバスケットを見せた。
「サンドイッチ作ってきたわよ？」
「おお！！ちょうどお腹が減ってたとこ！！」
「「今ケーキ食べてたじゃん・・・」」
「私もお腹減った！！」
「全然オッケー！！出して出して！！ごっつあんです！！」
僕と澪は、思わず唯に突っ込み、涼はケーキをほおばりながら、部長はたくさんの感謝の言葉を並べて、新たな食料の到達を歓迎した。

僕たちは、再び昔話を始めた。
机の上には、中学校の時のアルバムが置いてあり、僕と涼は懐かしい思い出に浸っていた。
「中学の時、私がしばらく熱を出して、学校を休んでたんだけど、毎日唯たちが、プリントを届けてくれてね。」
「私、風邪ひいたことないんだ～」
「私も～！！」
唯と涼が、サンドイッチを食べながら、小学生のような自慢をしてきた。
「ま、バカは風邪ひかないって言うしね・・・」
「「それ、どういう意味？」」
意味さえ分かっていないとは・・・
「でね、その時届けてくれたプリントに、唯と涼のテストが間違って挟まってて、なかなか散々な結果だったよ」

「あの頃は・・・あの頃もバカだったもんな～」
「「なんで言い直すの！？」」
僕たちは思わず吹き出し、唯と涼と、なぜか憂までも、顔を赤くしていた。
「変わってないな～」
「ホントホント。」
部長と澪が、唯たちを見ていった。
「でもね？」
和が少し微笑を浮かべて言った。
「あの時は、本当に助かったんだよ？」
「えへへ・・・」
唯は、感謝されて素直に照れている。
「そういえば律も・・・？」
澪が、何かを思い出したらしく、不敵な笑いを浮かべて部長を見た。
「あわわっ・・・言うなよ！！」
部長は、明らかに焦っている。
「ま、このキャラだし、ミスも多そうだよね？」
「そ、そんなことは・・・」
「そうだよ？たとえば・・・」
「え？何々？」
「こ、コラァ！！！」
「実はね、律ってね・・・？」
『アハハ！！』
僕たちは、笑い話を沢山した。
「ところで・・・勉強、大丈夫なの？」
「「「「「あ・・・」」」」」
すっかり忘れてた。

「ここまでがテスト範囲だからね？」
日が暮れて、辺りが少し涼しくなった頃。
僕たちは、引き続き唯のテスト勉強を行なっていた。
カクン、カクン
唯は、澪の説明を聴きながら、ほとんど寝かけていた。
「ここは、まず、Ｘの共通因数でくくって・・・」
「あ、うん・・・」
唯は、今にも寝てしまいそうだ。
しかし僕には、唯よりももっと大きな課題があった。
スー、スー
俺に寄りかかって寝ている、涼だ。
「涼にしては頑張ったほうかな・・・」
僕は、僕と涼の荷物をまとめた。
時間は約９時。
「あれ？聖都帰るの？」
「まあね。もうこんな時間だし、これだし・・・」
僕は、眠っている涼を指さした。
幸せそうに眠っている。
「そっか。それじゃあな。」
「またね～。」
「じゃあな。」
「ああ、うん。またあし・・・」
僕が立ち上がろうとしたその時。
「りっちゃん隊員！！」
唯が、突如目を覚まし、
「ご武運を・・・」
泣き出した。
「・・・もうすこし、ここに居たほうが良いのかな？」
「「「・・・うん。」」」
残留決定。

第２１話（後書き）

聖都「涼、寝るの早すぎ。」
涼「拙者は九時には寝る、模範生だよ！！」
聖都「はいはい。次回をお楽しみに。」
涼「何か気に食わない返事だな・・・」

第２２話（前書き）

４４・・・何か不吉な数字ですな・・・
不吉と言えば、もうすぐテストだ・・・
テスト多いよ・・・

第２２話

「出来た！！」
時刻は１０時半。
ようやくというか、なんというか。
「ん～、これだけ解けたら、大丈夫だろ？」
澪が、伸びをしながら言った。
「これで追試はバッチリね！！」
ムギさんも、ニコニコしながら言った。
「さすがに、これだけ勉強して合格点を取らないとおかしいよ・・・」
僕は、時計を見ながら言った。
休憩時間を抜いても、軽く5時間は勉強していたはずだ。
「それじゃ、私たちはそろそろ・・・」
そろそろ帰るべく、みんなが、片付けを始めた。
僕も、家に帰るべく、涼をおこした。
「ん・・・」
「おーい、帰るぞ～」
「え・・・？ここは誰？私はどこ？」
「ベタな寝ボケだね・・・」
「ベタっていうなぁ！！」
「近所迷惑。」
涼との軽いコントを済ませ、帰ろうとしたら・・・。
「あれ？律は？」
澪が、部長を探していた。
「ああ、そういえば・・・下の部屋に降りていったよ？」
僕たちは、片付けを済ませ、下の部屋に降りた。
そこで僕たちが見たのは・・・
「あ～！！また負けた！！」

「馴染みすぎ・・・」
「ってかまたって・・・？」
全く、相変わらずというか、なんというか・・・

次の日の朝。
僕と涼は、唯の調子が気になったので、唯と一緒に行くことにした。
唯は、相当緊張していた。
「唯、大丈夫か？」
「え？だ、ダダダダ大ィィ丈夫だよぉぉぉぉぉぉ！せせせせ聖ちゃあぁぁぁぁぁん！！」
「全然大丈夫じゃないじゃん・・・」
本当に、大丈夫かな・・・
「あ！！」
唯は、何かを思い出したようにカバンを開け、マジックを出した。
キュッ、キュッ
「じゃーん！！」
唯は、両手のひらに大きく、『カボチャ』と書いていた。
「「・・・は？」」
「緊張した時のおまじない！！隣のおばあちゃんに教えてもらったんだ～」
「「へぇ・・・」」
まぁ、そのおまじないのおかげか、唯は落ち着きを取り戻したみたいだ。
「あんだけ頑張ったんだから、心配する必要ないよ。」
「うん・・・そうだね！！」
唯は、元気を取り戻して、
「さぁ～！！学校までダッシュダッシュ！！」

学校に走っていった。
「待って、唯〜！！」
それを涼が追いかける。
「全く・・・相変わらずだな・・・」
けど、それが唯の良さかな・・・
僕は、一人で通学路を歩いた。

その日の夕方・・・
僕たちは、軽音部の部室に集まっていた。
まぁ、軽音部なのだから、当然といえば当然だけど・・・
それにしても、みんな落ち着きがない。
ドボドボドボ・・・
「ムギさん！？」
「え？あ！ごめんなさい・・・」
ムギさんは、お茶を注ぎながらボーッとしてるし、
澪は、さっきからぐるぐると回っているし、
涼は、ベースのチューニングがおぼつかないし、
部長はず〜っとお菓子を食べてるし、（いつもと一緒か・・・）
僕は、特に焦ることもなく、普通にギターを弾いていたが・・・
「聖都？」
「ん？」
「さっきから、同じフレーズしか引いてないよ？」
「え？」
どうやら、僕も結構ボーッとしていたらしい。
「唯、大丈夫かな・・・」
澪が、不安そうに言った。
「大丈夫なんじゃないの〜？」
「軽すぎだろ！！」

「もっと心配しろ！！」
僕と澪が、同時に声を荒らげる。
「でもさ・・・」
そこに、涼が割って入った。
「悩んでてもしょうがないし、唯を信じてみようよ！！」
涼は、屈託の無い笑顔で言った。
「そう、だな。」
僕は、唯の努力を信じることにした。

数日後。
本日は、運命のテスト返却日。
「今日返却だよね。唯、合格点取れてるかな・・・」
澪は、相変わらず心配そうだった。
「あれだけ勉強したんだから、大丈夫なはず・・・」
ムギさんの言葉の途中に、放心状態の唯が入ってきた。
あれ？
なんかデジャヴ・・・
「どうしよう・・・」
「またダメだったの？」
「唯、もしかして、満点だったり・・・？」
・・・コクッ
「「「「「「え？」」」」」」
「１００点とっちゃった！！」
「「「「「「「「「「ええ～？！」」」」」」」」」」
「極端な子！！」
まさかデジャヴが現実になるとは・・・
自分で言っておいて驚いた。

「じゃ、じゃあ、とりあえず記念撮影を・・・」
バシャ
写真には、１００点のテストを持ち、Ｖサインをした唯が写された。
「とりあえずこれで一段落だな！！」
「そうだね！！」
澪とムギさんが、興奮気味に言った。
「みんなのおかげだよ！！本当にありがとう！！」
唯は、みんなに対してお礼を言った。
「いや～、それほどでも・・・」
「「お前は何もしていない！！」」
「ひぃっ！！」
僕と澪は、調子に乗っている部長を睨みつけた。
「と、とりあえず練習しよう？」
ムギさんが話題を変え、練習をすることにした。
「テスト期間中も、コード練習してたらしいしね！！」
「ていうか、それが原因であんなことをする羽目になったんだけどね・・・」
「「「「「あはは・・・」」」」」
・・・笑えない。
「とりあえず、ちょっと引いてみてよ！！」
「えへへ～バッチリだから！！ＸでもＹでもなんでもごじゃれ！！」
唯は、自慢げに言った。
「「「「「え？」」」」」
しかし、僕たちは首をかしげた。
「コードには、ＸもＹもないけど・・・」
「あれ？」
「ま、いいや。とりあえず、コードＣは？」
僕が、コードの指定をすると、唯は固まった。
「・・・」
「どうしたの・・・？」

「忘れた・・・」
「「「「「「ええ?！」」」」」」
さらに笑えない・・・
っていうか拷問だ・・・
「いや～、ずっとXとかYとか勉強してたから・・・」
唯の脳内はどうなっているんだ・・・
「また一から・・・」
めんどくさ・・・
改めて、軽音部は前途多難なスタートを切った。

第２２話（後書き）

聖都「どうでしたか？」
涼「兄者も大変だぬ～」
聖都「なにその話し方・・・」
涼「まあいいじゃん。次回をお楽しみに！！」

第２３話（前書き）

ようやく４話です・・・
長かった。

第２３話

夏。
どうしようもないくらい夏。
木々が青く茂り、蝉が騒がしく鳴きたてている、今日この日。
本当は、唯の追試も終わり、ようやく練習が本格化してくる、はずなんだが・・・
「あだっ！？ゆ、指ぃ・・・」
「本当に忘れたんだな・・・」
唯がコードを完全に忘れてしまったため、部活のほとんどの時間を唯のコード練習に費やし、僕たちは全くと言っていいほど練習ができていなかった。
「あはは、相変わらずだよね・・・」
「ある種の才能だな・・・」
僕は、ため息をつき、ギターを構えた。
「いい？パワーコードと、ローコード。それにバレーコードは、絶対に覚えなきゃいけないんだからな？」
そう言って、僕はコードGを軽くストロークした。
「これがG。」
「じ、G・・・」
「そして、これがＡm。」
「エーマイナー？」
唯は、戸惑いながらもなんとかコードを弾いていった。
それにしても・・・こんなにきれいに忘れるとは・・・
「えへへ・・・おばあちゃんによく褒められたんだ～。唯は、ひとつ覚えると、ほかのことは全部忘れちゃうって。」
・・・どこに褒める要素が？
「それ、多分違うぞ・・・」
うん。多分ってか、絶対違う。

ガチャ
「あ、澪ちゃん。」
「どこ行ってたんだ？」
唯の特訓が一段落したところに、澪が入ってきた。
澪は、一番初めに部室に来ていたはずだが、なぜか何処かに居なくなっていた。
「・・・」
ツカツカツカツカ・・・
澪は、僕たちを無視して部室の奥に行き、振り返りながら、
「合宿をします！！」
若干キレ気味に、そう言い放った。
「「合宿？」」
涼と唯がハモる。
「そう。もうすぐ夏休みだし。」
「もしかして海？！それとも山？」
部長が、楽しそうに言った。
しかし、
「遊びに行くんじゃありません！！」
澪が一蹴した。
「バンドの強化合宿！！」
「要するに、このままじゃマズイから、一日みっちり練習するって事でしょ？」
「へぇ。確かに必要かもね～」
正直言うと、俺の頭には既にその構想があった。
しかし、問題がいくつかあり、うかつには言い出せなかった。
最初の問題は・・・
「着ていく服買わなきゃ！！」

「水着も買わなきゃな。」
「話を聞け！！」
こいつ等だろう。

「夏休みが終わったら、もうすぐ学園祭でしょ！？」
「「「「「学園祭？」」」」」
日直の仕事を終えたムギさんが合流した僕達は、夏休み合宿に向けての、具体的な構想を練っていた。
それにしても・・・
「学園祭があるのか？」
「うん。桜高祭での軽音部の演奏といえば、昔は結構有名だったんだぞ！！」
「へぇ。」
まあ、何処の高校にもあって当然だし、文化系の部活はそこが見せ場なのだろう。
それに、この学校は少し事情が違うらしい。
澪に聞いた話によると、女子高時代の名残から、体育祭をせず、その分を学園祭に向けているらしい。
「高校の学園祭って、凄いんでしょ！！」
唯が、目を輝かせながら言った。
「模擬店！！」
「焼きそば！！」
「たこ焼き！！」
「・・・何のしりとりだよ。」
「というか、しりとりじゃないね。」
ぐっ、そんなことはおいといて・・・
「じゃあ、結構ハードル高・・・」
「私、メイド喫茶がやりたい！！」

「え～？お化け屋敷がいいよ～」
僕の言葉を遮って、部長、唯が言った。
「ちょっと聞きたいんだけど、お前ら軽音部か？」
「「あ・・・」」
「「あはは・・・」」
僕の言葉に、唯と部長は今更驚いたような顔をして、ムギさんと涼は苦笑いだった。
「私たちは軽音部だから、ライブをするの！！」
澪は激怒。唯と部長は唖然。僕は呆れ、涼は苦笑い。
辺りに、微妙な空気が流れる。
「えっと・・・」
その沈黙を、、ムギさんが破った。
「マドレーヌ、食べる？」
「「食べる！！」」
「「「ハァ・・・」」」
まったく、少しは成長して欲しい。

「ムギはどう思う？いくら慌てずやろうって言ったって、もう三ヶ月にもなるのに、一度もあわせたことないなんて・・・」
「まぁまぁ・・・」
ムギさんは、とりあえず澪をたしなめようとした。
「・・・六回。」
唯は何をやってるんだ。
「行きましょう、是非！！」
ムギさんが言った。
「みんなでお泊りにいくの、夢だったの！！」
「そうなんだ～。」

って、何か勘違いしてないか？この人。
「ムギさん、話きい・・・」
「じゃあ海にする？それとも・・・」
「だから！！バンドの強化合宿って言ってるだろ！！」
澪、予想以上に大変そうだな・・・
とにかく、行くことは決定した。

「そういえば、行くなら行くで、何個か問題があるよ？」
僕が言った。
「「「「「問題？」」」」」
「うん。まずは、泊まる所。今は学園祭のシーズンじゃないし、学校に泊まらせてもらえるかは分からないよ？」
まあ、澪がこのくらい考えているとは思うけど・・・
「ああ、そうだよね・・・」
前言撤回。澪は、何も考えてなかったらしい。
「いくら位かかるのかな？」
唯が言った。
唯にしてみれば、お小遣い１０ヶ月分も前借りしているのだから、お金はなるだけ掛けたくないはずだ。
「そうだぞ？きつくないか？」
「私も、なるだけ出費は減らしたいかな・・・」
涼と部長も、追い討ちを掛けた。
「そ、それは・・・」
澪は、小さくなって黙り込んでしまった。
確かに、正論ではあるが、これでは澪が可哀想だ。
「む、ムギ？」
俺が助け舟を出そうとしたら、澪はムギさんを呼んだ。

助け舟といっても、何も考えていなかったのだが・・・
「別荘とか・・・？」
「ありますよ？」
「「「「「あるんかい！！」」」」」
本当にお嬢さまじゃんか・・・
これで、問題は解消。
「それじゃ、行ってらっしゃい。」
「「「「「え？」」」」」
ここから先は、僕には関係のない話だ。
「聖都、行かないの？」
「そんな・・・」
「しょうがないだろ？女の子ばかりのところに泊まりに行くほど、僕は不純じゃないよ。」
1人が兄妹とはいえ、女の子5人だけのところに、僕一人が行くわけには行かない。
「大丈夫だよ！！聖都は男の娘だしさ。」
「何か発音おかしいよ！？」
それはどっかの双子の弟でしょ・・・
「それに、聖都はそんなことをするような奴じゃないだろ？」
澪が、笑顔で言った。
その笑顔で迫られると、断れない・・・
「分かったよ。いくよ。」
「「「「「やった！！」」」」」
こうして、僕たち軽音部の合宿が決まった。
何か、流されちゃったな。

第２３話（後書き）

聖都「はぁ・・・」
涼「どうしたの？」
聖都「まさかこうなるとは・・・」
涼「けど、見方によってはハーレムだよ？」
聖都「そうだな・・・」
涼「？まあいいや。次回をおたおし・・・お楽しみに！！」
聖都「そこ噛んじゃダメッしょ・・・」

第２４話（前書き）

合宿編です

第２４話

合宿当日の朝。
ピンポーン
「唯～」
僕たちは、唯の家にいた。
と言っても、家がすぐ隣りだから、別に苦労はしないけど。
なぜ来ているかというと、僕たちの家に集合して一緒に行くはずだったけど、その時間になっても一向に来る気配がないから。
「出てこない・・・」
「まだ寝てるわけ、ないよね・・・」
ガチャ
「「あ、ゆ・・・」」
「遅れてすみません・・・って聖都さん？」
玄関から出てきたのは、唯ではなく憂だった。
「あれ？唯は？」
「お姉ちゃんはまだ寝てますけど・・・」
「「すぐ起こして！！」」
まさか、本当にまだ寝てるとは・・・
「え？あ、はい。わかりました！」
僕たちがそうとう焦っているのに気づいた憂は、急いで唯の部屋へと走っていった。
「まったく・・・」
僕は、ケータイを取り出し、唯に電話した。
Ｐｒｒｒｒ、Ｐｒｒｒｒ
『・・・もしもし？』
「・・・お目覚めですか。」
『・・・はい。お陰様で・・・』
「すぐに準備しなさい！！」

『はっ、はぁい！！』
ピッ
「・・・涼、」
「な、なに？」
「すぐに澪に謝罪の電話を入れて。」
「分かったから、そんなに気を落とさないで・・・」
これが気を落とさずにいられるか・・・
軽音部では、僕が唯の保護者（？）代わりだから、責任は僕に来る。
「ハァ・・・」
「・・・ファイト。」
唯が来たら、目一杯怒ってやる・・・

電車の中・・・
「「「ごめんなさい！！」」」
僕たちは、電車が出発する１０分前に、駅に到着した。
そこから猛ダッシュで目当てのホームに行き、『駆け込み乗車はおやめください』のアナウンスを無視し、電車に飛び込んだ。
「なんとか間に合った～」
唯が、ホッとしたように椅子に座る。
席は、三列シートを向かい合わせた形にして、僕、涼、唯が進行方向側、澪、部長、ムギさんが進行方向とは逆側に座っている。
「まったく・・・聖都がきちんと連れてこいって、いったじゃん！」
「ごめん・・・」
やっぱり怒られた。
実際は、俺は無実だ！！
「唯も、あれだけ寝坊しないようにっていったのに・・・」
「えへへ・・・ワクワクしてうまく眠れなくて・・・」

「「遠足前の小学生か・・・」」
僕と部長が同時に突っ込む。
「むぅ！！私は遠足に遅刻したことないよ！！」
「じゃあ退化してるのか？」
「というか、小学生ってとこ否定しなよ・・・」
全く、よく高校受かったな。
補欠合格だけど。
「そうでもないみたいだぞ？」
澪がそう言って、ムギさんをみた。
「ああ、なるほど・・・」
ムギさんは、ぐっすりと寝ていた。
「ほら！ムギちゃんも仲間だよ！！」
「「遅刻したやつと一緒にするな。」」
「みんな、今日なんか怖い！！」
実は、俺も寝不足なんだよ・・・
おそらく部長もそうだ。
「それにしても、よく寝てるね・・・」
涼が、ムギさんを見ていった。
「夢だって言ってたもんね～」
唯も、じーっと見つめている。
すると、
「ウフッ、ウフフフ！」
「いきなり何！？」
怖いよ！！
「シーッ！！」
「ムギが起きるだろ！！」
「ごめん・・・」
というか、あんたたちも結構な声量なんだけど・・・
「・・・ゲル状がいいの～」
「「ゲル状？！」」

「ゲル状って、ウ〇ダー？」
どんな夢だよ・・・
「どんな夢見てるんだろ～！！」
夢にゲルなんて出てきたことねぇ・・・
覚えてないけど。
「おし！」
部長が、カメラを取り出した。
「写真に収めとこうぜ～」
人の寝顔を撮るなんて、なんて酷いことを・・・
けど、相手がムギさんならそうでもないか。
「・・・何が基準？」
「あれ？聞こえてた？」
「いや、フィーリング。」
「エスパー！？」
双子だからか？
白崎涼、妹ながら恐ろしい。
「よしなよ～、かわいそうだよ～」
「思い出、思い出～♪」
そう言うと、部長はシャッターを切った。
パシャ。
「ん、んん・・・」
ムギさんが、目を覚ました。
どうやら、カメラのフラッシュで目が覚めてしまったらしい。
「あっ、ごめんなさい・・・」
「謝らなくていいよ？」
ムギさんは自分だけ寝たことを悪いと思ったのか、とりあえず謝った。
それを、涼がフォローする。
「ほら、起きちゃったじゃん。」
「悪い悪い。」

悪いと思ってないだろ・・・

第２４話（後書き）

作者「・・・ただいま絶賛迷走中。」
聖都「どうやらそのようだね。」
涼「最近、文がしりめつれちゅ…支離滅裂だよ？」
聖都「・・・ちょっと黙っておいてくれ。」
涼「しどい！！」
作者「誰かコメントを！！」

間違えて投稿してしまったので、その穴

涼「間違えて投稿してしまった分の穴を埋め妖怪！！！！」
「「「いえ～い！！」」」
聖都「・・・どんな妖怪だ？」
涼「とりあえず、目標２００文字で。」
聖都「スルーか・・・」
澪「じゃ、何をするの？」
唯「みんなでダンス！！」
聖都「・・・却下。」
唯「ええ～？楽しいよ？」
涼「それは多分唯だけ。」
澪「じゃあ、作曲は？」
聖都「う～ん・・・５分じゃむりじゃない？」
澪「そっか・・・」
涼「じゃあ、パーティ！！」
聖都「なんにもないのに？」
涼「うう・・・」
ムギ「ファーストフードはどうですか？」
聖都「いや、バイトじゃねぇし・・・」
律「じゃあ・・・」
聖都「あ、もう２００字突破下からオッケー。」
「「「お疲れ様～」」」
律「おい！！私をほっとくな！！」

間違えて投稿してしまったので、その穴（後書き）

すみませんでした・・・

第２５話（前書き）

合宿編、まだ×４続きます。

第２５話

「そういえば、そろそろ教えてよ！！」
部長が、起きた・・・起こされたムギさんに言った。
「ええと・・・もうすぐ。」
笑顔で言葉を濁すムギさん。
「到着までのお楽しみってこと？」
「はい。けど・・・」
ムギさんが、外を見ながら言った。
と言っても、トンネルに入った所為で、周りの景色が見えない。
「直ぐに解りますよ♪」
ムギさんが言い終えるのとほぼ同時に、電車はトンネルから出た。
「「「わぁ～！！」」」
窓から見える景色に、僕たちは目を奪われた。
唯たちが歓声を上げるのも無理ない。
そこには、見渡す限りの、海、海、海！！
「海・・・」
「海か。」
「はい。海。」
僕は、思わず絶句してしまった。
というのも、僕はこれまで、海を見たことがなかった。
「綺麗だな・・・」
本当に綺麗。
オーシャンブルーって、このことだったんだ・・・
気がついたときには、身を乗り出していた。
「唯、涼！」
部長が、窓枠に手をかけた。
「うん！」
「任せて！！」

唯と涼も、窓枠に手をかけ、
「「「せーの！！」」」
バッ！！
大きく窓が開かれた。
それと同時に、海沿い特有の、潮の香りが漂ってくる。
「わ～、潮の匂いだ～！！」
「カモメがいっぱいだ！！」
「よーし、泳ぐぞ！！」
「おい、だから、遊びに来たんじゃなくて・・・」
「「わ～い！！」」
澪が、目的を再確認させようとしたが、無駄だった。
そういう僕も、「練習に来たんだろ」と言いかけて、口を閉じた。
確かに、見るだけで泳ぎたくなるような、そんな景色だった。
それに、水着を持って来いと言われていたので、一応持ってきている。
「僕も、ひと泳ぎしたいかな・・・」
「聖都まで！！」
僕は、椅子に座り直した。
「澪ちゃん？」
ムギさんが、澪を呼んだ。
澪は、とても憂鬱そうな顔をしている。
そんな澪に、ムギさんがニッコリと笑いかけた。
多分、そういう澪も、遊びたい自分との葛藤に苦しんでいるんだろう。
「聖都・・・」
澪が僕を呼んだ。
「ん？」
「あの、なんていうか・・・」
「ちょっとくらいなら、遊んでもいいんじゃない？」
僕は、澪の言葉を遮っていった。

「練習して、間にちょっと遊んで、また練習して・・・ってすればいいんじゃない？」
「・・・」
僕は、それ以上は言わず、外の景色を見た。
さすがに、今の言葉は野暮だったかな？
確かに、今の僕たちには時間がない。
時間がないのは分かってるけど、どうせならみんなで楽しく演奏したいっていうのは、欲張りすぎかな？
まあ、澪も、少しスッキリしたみたいだから、大丈夫か。

数十分後。
今回お世話になる、ムギさんちの別荘についた。
とりあえず、感想を言わせてもらうとすると、
「デカッ！！」
ウチと同じくらいはありそうだ。
普通別荘って、ちっちゃなコテージとかじゃないの？
これは、普通に住宅だ。
「「「おお～」」」
部長、唯、涼も、その大きさに驚いている。
「本当は、もっと広いところに泊まりたかったんだけど・・・」
僕たちが感心しきっているところで、ムギさんが、いきなりお嬢様発言をした。
もっとってことは、これより広い別荘があるのか？
それ以前に、この他に別荘があるのが驚きだよ・・・
「一番小さいところしか借りられなかったの・・・」
「い、一番小さい・・・？」
部長が、小さく漏らした。

当然、僕も同じ気持ちだ。
こんだけあれば十分でしょ・・・
というか、これ以上広くても、人数の割に合わないんだけど・・・
ダメだ。突っ込みどころが満載すぎて、とてもじゃないけど一人では対応できない。
「とりあえず、中に入ろう？」
僕が言った。
実際、このクソ暑い中で、外で話し込む理由が、これっぽっちも見当たらない。
「そうだね。じゃ、」
唯が、勢いよくドアを開ける。
「「「わぁ～！！」」」
唯、部長、涼が本日二回目の歓声を上げた。
「広～い！！」
「すっげぇな～」
「おっ、海が見える！！」
「「どこどこ？！」」
唯たちが、部屋中をはしゃぎ回る。
「涼しい・・・」
僕は、クーラーの前で、ショートしかけた頭を冷やしていた。
「確かにすごいな～・・・って、これは？」
澪が、テーブルに置いてあった、いろとりどりの果物を指さしていった。
へぇ、これほどのレベルになると、フルーツの盛り合わせはデフォルトなのか・・・
「あっ、ごめんなさい！！」
なぜか謝るムギさん。
「何もしておかなくていいっていったんだけど・・・」
・・・唯と涼も見習って欲しい。
その唯たちは・・・

ガチャッ
「ここはなんだ?!」
「おお、お姫様ベッド!!」
「冷蔵庫は?」
「今調べるぜ!!ていやっ!!」
「おお、高そうなお肉・・・」
「うまそう!!」
人んちを好き放題に荒らしていた。
「ご、ごめんなさい・・・」
そして謝るムギさん。
なんか、むしろこっちが謝りたいくらいだ。
すみません・・・

第２５話（後書き）

聖都「え～っと。重大なお知らせがあります！！」
涼「何々？」
聖都「明日から、うちの学校は、テスト休みに入るんです。」
涼「ふむふむ。」
聖都「そして、テスト休みの間は、パソコンがほとんど使えないんですっ！！」
涼「なんですと！？」
聖都「そして、僕にはこの作品よりも前から連載している小説があるんですが、そっちは毎日連載を約束しているので、そっちをしなくてはいけません。」
涼「と、言うことは？」
聖都「よーするに、明日から金曜日までおやすみします。」
涼「そうですか。」
「「本当にすみません！！」」

第２６話（前書き）

お久しぶりの投稿ですっ！！
合宿編、レッツゴ～♪

第２６話

「そういえばさ、なんで謝ってるの？」
部長と唯の冒険を抜けてきた、涼が、ムギさんに聞いた。
「これだけされたら、むしろ感謝したいくらいなのに。」
「それはね、みんなは普通に楽しみたいのに私がいろいろ用意したら、面白くないと思うから・・・」
ムギさんが、不満そうに言った。
「私はいつも普通にしたいって言ってるのに、なかなかわかってもらえなくて。」
「そんなもんなんだ・・・」
恵まれている人ほど普通を求める・・・
やっぱ金持ちってそうなのか・・・？
「みんなといるんだから、何にもしてもらわなくても、十分楽しめるのに・・・」
「そうなんだ～。」
涼は多分、適当に相槌を打っているだけだろう。
「ごめんな。気を遣わせて。」
澪が、申し訳なさそうに言った。
「いえ・・・あ、着きました。どうぞ～♪」
ムギさんに連れてこられたのは、練習場。
そこには、アンプ、ドラムセット、マイクなどが一通り揃っていた。
「わぁ～・・・」
澪は、目を輝かせながら、室内を見渡している。
「なかなか良さそうなアンプだね～♪」
涼は、一つのアンプを撫でていた。
それにしても・・・
よくこんな設備があったな・・・
防音はもちろん、ドラムセットやアンプだって、バカにならない金

額のはずだ。
「・・・凄いな。」
思わず、感想が口に出てしまった。
「どうして？」
「これだけの設備をするには、相当資金が・・・」
僕は、言いかけて口を閉じた。
琴吹家の財産が如何程かは知らないけど、これだけの別荘に比べたら、案外安いものか。
「どうしたの？」
「なんでもない。」
ムギさんは、俺に不思議そうな目線を送ってきたが、俺は適当に答え、中に入った。
「しばらく使ってなかったから、使えるかどうか心配だけど・・・」
ムギさんは、俺が部屋に入ったあとに部屋に入り、、その後部屋を見渡した。
「アンプは大丈夫みたいだよ？」
涼が言った。
「うん。こっちも大丈夫そう。」
澪が、別のアンプを見ながら言った。
「そういえば、唯たちの探検はまだ終わらないのかな・・・？」
僕は、なかなかここに来ない唯たちのことが、気になってきた。
「そういえば、来ないね・・・」
「まったく、しょうがないな・・・」
もしかして、迷子・・・？
澪は、やれやれと頭を振りながら、古びたラジカセを取り出した。
「ラジカセ・・・？」
「なぁに、それ？」
「ああ、これ？」
澪は、再生ボタンを押した。
すると、

♪♪♪～～

「昔の軽音部の、学園祭でのライブ。この前、部室で見つけたんだ・・・」

なるほど。

澪が焦る理由が、ようやく分かった。

「・・・上手。」

「・・・上手いね。」

「・・・だね。」

その演奏はプロのバンドと比べても、遜色ないほどの演奏をしていた。

「私たちより、相当・・・」

「「「・・・うん。」」」

この人たちと僕たちの前には、とても大きな壁がある。

「私、これを聞いてたら、私たちも負けたくない、って思ったんだ・・・」

「それで、合宿をしたいなんて言い出したのね。」

これは、少しでもこの人たちに追いつきたいという、澪の熱い思いからの合宿だったんだ。

「うん。でも・・・」

「負けないと思う。」

「・・・だね。」

「異議なし。」

「えっ？」

ムギさんの言葉に、僕と涼が同意した。

そのことに、澪は驚いている。

「・・・わたしたちなら。」

「努力すればの話、だけどな。」

「なんたって、夢は武道館ライブなんだから！！」

「みんな・・・」
みおが、何かを言おうとしたそのとき・・・
「遊ぶぞぉ！！！」
「オ～イエ～！！」
ガクッ
「練習は！？」
「先行ってるから、二人とも急いでね～」
「・・・バカ。」
「唯、律ちゃん、君たちは危機感もとうよ・・・」
僕たちは呆れ、
「「はぁ～・・・」」
大きなため息をついた。
「ムギ、これでも・・・？」
「え、ええ・・・」
ムギさんも、返答に困っている。
「おーい！！」
「早く！！」
相変わらず、呑気な声が聞こえてくる。
「ちょっと待って！！」
ムギさんが答え、僕たちを見た。
「みんな、行こう？」
「え？」
「・・・いくの？」
「私は行きたいけど・・・」
「せっかくだし、少しくらいなら・・・」
「で、でも・・・」
澪は、未だに躊躇している。
「ムギ～、行くぞ！！」
「ハ～イ。」
「聖ちゃんたちも！！」

「・・・はいはい。」
「唯～、ちょっと待ってて！！」
僕たちは、部屋の外に出た。
「・・・先行っとくから。」
「澪ちゃん、早く来てね！！」
僕は、そう言って部屋へと向かった。
そのあと、
「私も行く～！！」
なんて澪の半べそな声が聞こえた。

第２６話（後書き）

謙太「全く、唯たちはなんであんなに変わらないんだろ・・・」
涼「ホントだね～」
謙太「・・・その『たち』に、お前も入ってるんだけど、」
涼「ええ?!私は成長してるよ!!」
謙太「シラネ」
涼「酷いっ!!」
謙太「・・・次回をお楽しみに。」

お知らせ。

すみません・・・
本当に勝手ですが、しばらく休刊をさせていただきます。
さすがに学生の分際で、２刊同時は無謀でした・・・
自分でも反省しています。
自分、調子乗ってました。
すみません・・・
いつかまた、更新できたらいいと思っています。
自分勝手ですみません・・・
何時になるかは分かりませんが、なんとか終わらせたいと思います。
それまで待っていてくだされば、本当に幸いです。
本当に申し訳ありませんでした。
もう一個の方は、きちんと最後まで続けますので、応援よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0893t/

けいおん！　転生しちゃった僕。

2011年7月26日10時50分発行